

公開資料

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
実装活動終了報告書

研究開発成果実装支援プログラム

「被介護者の状態から得られる情報に基づく

質の高い介護サービス支援システムの実装」

採択年度 平成28年度

実装支援期間 平成28年10月～令和元年9月

実装責任者 神成 淳司

(慶應義塾大学 環境情報学部、教授)

1. プロジェクト名・目標・活動要約

(1) 実装活動プロジェクト名

「被介護者の状態から得られる情報に基づく質の高い介護サービス支援システムの実装」

(2) 最終目標

平成 28・29 年度の沖縄県社会福祉事業団での介護サービスの改善(個々の介護者の対応能力の向上)につながる実績を踏まえ、他事業者を含めた都道府県の事業団への横展開と持続的な活用体制を構築する。この際、既に検討をしている、厚生労働省の研修補助制度「雇用管理制度助成金」、「キャリア形成促進助成」の利活用を進めると共に、その具体的な効果についても検証し、今後、持続的な活用が図れる実績を提示する。取り組みを通じ、我が国の介護サービス全体への普及を図ると共に、我が国の介護サービスが世界的にも高水準であること、超高齢化社会の到来とそれに伴う良質な介護サービスの提供が世界的にも求められていることを踏まえ、海外への展開も検討する。

さらに、現行の介護保険制度の変革を目指す。すなわち、現行の介護保険制度は、介護サービスが、介護者と被介護者(利用者)間の人数比(例えば、介護者1人が4人の利用者に対応する場合は、1対4)でのみ評価され、個々の介護者の対応能力が考慮されていない。介護者の対応能力を踏まえた介護保険制度の改定(良質な介護サービスを提供する介護事業者が利益を獲得できる)に関する提案を、厚生労働省老健局に対し、本実装活動を通じて得られた具体的な事例に基づき実施していき、介護保険制度の改革を推進する。

(3) 実装支援期間終了時の目標(到達点)

平成 28・29 年度においては、状態把握システムを導入済みの沖縄県社会福祉事業団において、プロジェクトの効果(個々の介護者の介護サービス向上に伴う、対応能力の向上等)に基づき、プロジェクト終了後も持続的に利用できる体制を確立すると共に、その他の事業者において導入する際に必要とされる「気づきデータ運用マニュアル」を整備し、その有効性を検証する。

これら取り組みを通じ、介護者の対応能力向上が、利用者の状況改善(要介護度や ADL の改善)や、より多数の利用者に対応できることを数値としてまとめ、最終目標にも掲げた、現行の介護保険制度が、介護者と利用者との人数比を根拠として成立している状況を問題点として、全国社会福祉事業団を始めとした介護関連団体に示すと共に、厚生労働省への問題提起を行う。

(4) 活動実績（要約）

① 導入・実装支援

初期実装サイトの沖縄県社会福祉事業団・宮古厚生園、同地域への展開として平成29年度に沖縄県社会福祉事業団・名護厚生園、他地域への展開として平成30年度に社会福祉法人群馬県社会福祉事業団・明風園において状態把握システムを導入した。初期段階での職員研修、運用段階における気づきデータの活用に関する取り組み（定例ミーティング（以下、「フィードバック会議」）など）を継続的に支援し、状態把握システムの運用（活用）について、実装サイトの管理者や介護者が理解し全体に浸透できたことで、今後、状態把握システムを、実装サイトが自律的に運用（活用）できる体制が確立できた。

また、「コメントの入力（洞察）」や、入力対象の利用者を絞る「ピックアップ入力」など、新たな運用についても積極的に実施したことで、よりスムーズに状態把握システムを導入できる可能性が広がった。

全期間を通して、実装サイトの介護者に対して行ったアンケート・ヒアリングの結果からは、状態把握システムの導入による効果として、気づきの共有による介護サービスの質の向上効果、介護者同士のコミュニケーションツールとしての効果、新人介護者がより早く利用者の変化に気づけるようになるなど、人材育成の効果が確認できた。

② 気づきデータ運用マニュアルの策定

状態把握システム導入事業者において、個々の介護者が「気づき」の概念や「気づきデータ」に関する理解を深め、主体的に運用できるように、「気づきデータ運用マニュアル」を策定した。初年度に作成した素案をもとに、新規実装サイトにおいて、初期研修やフィードバック会議での介護者への説明に使用し、アンケートやヒアリングで効果を検証しながら改良を重ね、現場での入力負担低減のための「ピックアップ入力方式への対応」や、施設での自律的運用に役立つ「ファシリテーター向けガイド」部分を追加して完成させた。今後新たな事業者において導入する際にも活用する。

③ 気づきデータ項目の信頼性・妥当性検証

平成28年度は、宮古厚生園において、利用者の状態変化に関するデータ・グラフを参考に、「気づきデータ項目の信頼性・妥当性（項目と利用者の状態変化との相関等）」に関するヒアリングを実施した。ヒアリングでは、個々の項目状況に基づき介護者側が行動を変化させたことにより、利用者の状態変化が促された結果が多数示され、項目と利用者の状態変化との相関性が確認できた。

平成29年度は、名護厚生園において入力された気づきデータを解析し検証を実施した。結論として、①複数の介護者が判断した利用者の状態は、利用者の真の状態に近いと考えられる、②状態把握システムを継続的に運用することで、介護者が利用者の状態を把

握する能力が高められている、という二点が確認できた。

④ 今後の社会実装に向けて

気づきデータに関する取り組みについての知見を有する鳥取県米子市の「社会福祉法人こうほうえん」、今回の実装サイトが参加する全国組織である「全国社会福祉事業団協議会」、並びに介護記録ソフトの大手ベンダー等と、全国展開の際のサポート体制の確立等、今後の持続的なサービス提供についての協議を実施し、令和2年度（2020年度）からの持続的なサービス提供体制を確立する予定である。

2. 実装活動の計画と内容

(1) 全体計画

項目	平成28年度 (6ヶ月)	平成29年度	平成30年度	平成31年度 (6ヶ月)
A. 初期実装サイトでの実装				
1. 状態把握システムの運用状況調査	←→			
2. アンケート・ヒアリング		←→		
3. 気づきデータ運用マニュアルの効果検証		←→		
B. 同一地域への展開				
1. 状態把握システムの導入・実装		←→	←→	
2. 現場支援・研修指導		←→		
3. アンケート・ヒアリング			←→	
4. 気づきデータ運用マニュアルの効果検証			←→	
C. 他地域への展開				
1. 状態把握システムの導入・実装			←→	←→
2. アンケート・ヒアリング			←→	←→
3. 気づきデータ運用マニュアルの効果検証			←→	←→
D. 実装成果とりまとめ				
1. 気づきデータ運用マニュアルの策定・改良	←→	←→	←→	←→
2. 気づきデータ項目の信頼性・妥当性検証	←→	←→		
3. 実装成果とりまとめ			←→	←→

(2) 各年度の実装活動の具体的内容

《平成28年度》

平成28年度は、次年度以降の新規導入を円滑に進めるための基盤作りを目的とし、以下4点実施した。

① 状態把握システムの運用状況調査

初期実装サイトとする沖縄県社会福祉事業団・宮古厚生園において、導入済みの状態把

握システムの運用状況調査（気づきデータの入力数等）を実施した。宮古厚生園での気づきデータの入力数については、平成28年1月上旬の状態把握システム導入から平成29年3月までの期間で、1日あたり平均198件、累積件数で83,967件であり、一定規模の安定した入力数で推移していることが確認された。なお、入力数が安定的に推移されるためには、介護者間での相互の声掛けなど、本システムの利活用と関連するコミュニケーションを継続する必要があるという指摘もみられた。

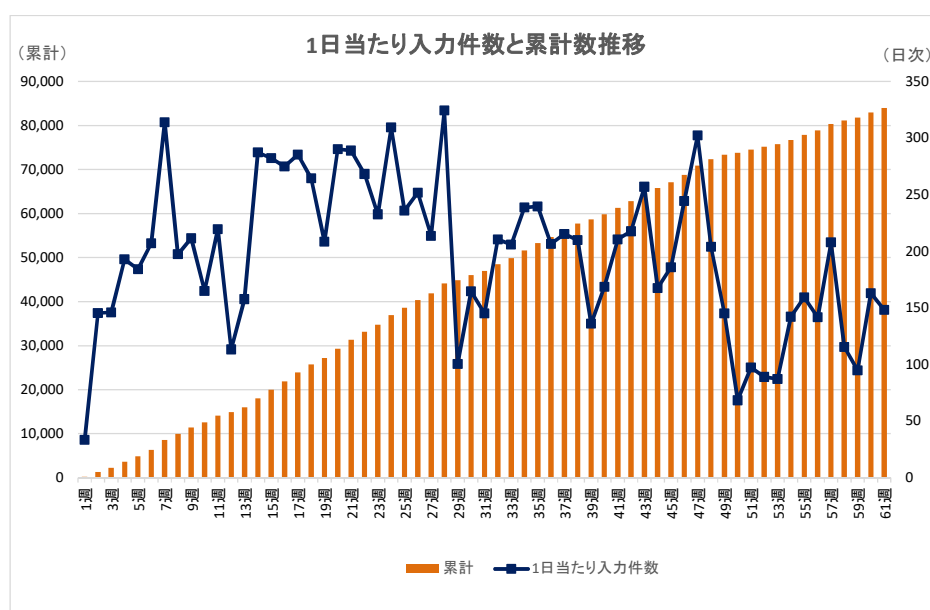


図 1：宮古厚生園における1日当たり入力件数と累計数推移（平成28年1月～平成29年3月）

介護者1日あたり入力件数をみると、全期間を通じ、増減は見られるものの、途切れることなく一定レベルを維持することができた。導入後から約半年間、介護経験が3年未満の職員の入力件数の伸びが顕著であった。

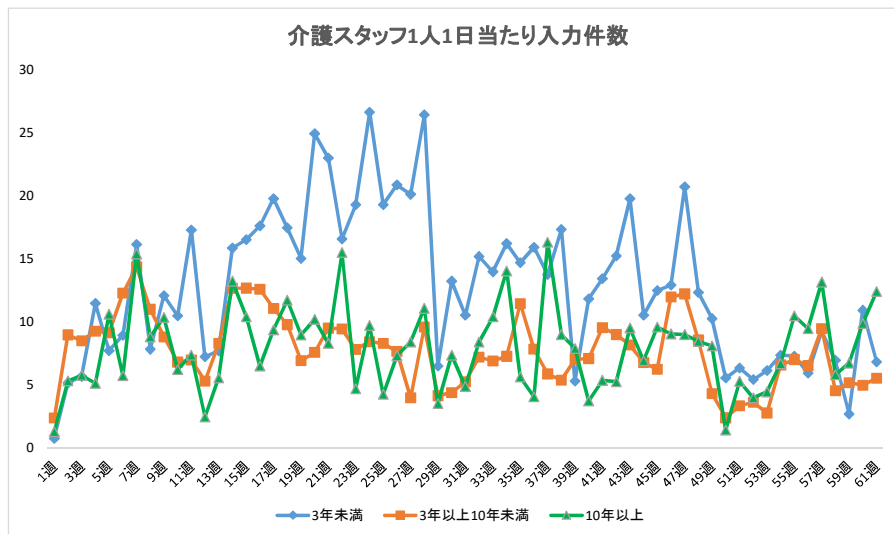


図 2：介護者1人1日当たり入力件数の推移（平成28年1月～平成29年3月）

② 「気づきデータ運用マニュアル」の素案策定

「気づきデータ運用マニュアル」は、個々の介護者が直面する課題に対応したマニュアルである必要があるため、素案を策定した上で、状態把握システムを利用中の介護者へのアンケート・ヒアリングを実施し、意見を求めた。全体構成については、「気づきデータ運用マニュアル」は、「気づきとは」「気づきデータの読み方」「気づきデータの活用方法」「FB会議のファシリテーション」の4部構成とすることで賛同が得られた。「気づきとは」の章の素案を配布し、意見を求めたところ、「気づき項目のうち『洞察』の定義や説明を充実化して欲しい」、「素案の記述は口頭で説明してもらえれば理解できるか、自分で読んで理解するには難解なので、より分かりやすい表現にして欲しい」、「『パッシブ気づき』と『アクティブ気づき』という表現は分かりにくいので、その部分の説明の記述を工夫して欲しい」、「気づきの『広さ』と『深さ』の概念が分かりにくいので、その部分の説明の記述を工夫して欲しい」、といった意見が出されたため、これら4点の意見に対応した改訂を実施した。

③ 気づき項目の信頼性・妥当性の確認

個々の気づき項目の妥当性評価のために、状態把握システムを利用中の介護者へのアンケート・ヒアリングを実施し、項目と利用者の状態変化との相関性について確認した。ヒアリングでは、具体的な利用者の状態変化状況を踏まえるために、利用者の状態変化に関するデータ・グラフ集を参考資料として用いたところ、以下に示すように、個々の項目状況に基づき、介護者側が行動変容を実施したことにより、利用者の状態変化を促す結果が多数示された（以下、個人情報保護の観点から踏まえ、1つの事例のみ抜粋）。

利用者Aにおいては、毎日、歌を大声で歌うといった行為が存在し、他の利用者とのトラブルの源泉にもなっていた。個々の気づき項目を検証したところ、この利用者Aについては、気づき項目の入力要素が時間的にも项目的にも偏っている（歌を歌うという行為に関するもの）ことが判明。その他の時間帯において、利用者に直接介入、介助することによって得られる気づき（アクティブ気づき）の入力を介護者が実施するよう行動が変容したところ、利用者Aの歌の頻度が大幅に減少。生活パターンも落ち着いたものとなった。

特定の行動（歌）の際に介入行動が集中していたことで、利用者自身の中にその行動をさらに強める行動変容が生じていたことが推察。この結果に基づき、他の利用者についても同様の事例が無いかを確認し、その効果を検証している。

社会性行動	洞察	気づき	ケア行動	働きかけ
交流 独り言 楽しみ 仕事	洞察	表情 意欲 声 仕事	情報 排泄 介助 食事 車いす 睡眠 身支度 入浴 歩行	声かけ 触れ 思い 出

表 1：状態把握システムに蓄積される気づき項目

また、気づき項目の信頼性・妥当性の確認については、DCM (Dementia Care Mapping) の中核研究機関である、認知症介護研究・研修大府センターと意見交換を実施した。認知症介護研究・研修大府センター側より、DCM研究の発祥であり世界の研究機関の中核となる英国ブラッドフォード大学における状況に関する説明を頂き、項目の妥当性や今後の取り組みについて協議した。DCMとは取り組みの手法は異なるものの目指すべき大きな方向性（福祉分野でのサービス提供者の状況改善）では一致しているということで合意し、今後の連携体制を構築した。

《平成29年度》

初期実装サイトとする沖縄県社会福祉事業団・宮古厚生園と同地域への展開と体制整備、新規導入の際に必要なとされる「気づきデータ運用マニュアル」の整備を目的とし、以下4点実施した。

① 名護厚生園への状態把握システム新規導入

沖縄県社会福祉事業団・名護厚生園において、状態把握システムを新規導入し、現場支援・研修指導による実装を図った。具体的な現場支援・研修指導内容としては、初期段階での職員研修、並びに運用段階における気づきデータの活用に資する取り組み（フィード

バック会議時に用いる資料作成、フィードバック会議のアジェンダ作成とファシリテーション等)である。これら取り組みを通じ、次年度以降、実装機関が主体的にフィードバック会議の運営を実施出来る事を念頭に取り組みを進めた。

名護厚生園の A グループ利用者 24 名、介護者 11 名（主任 1 名、担当介護者 10 名）を対象に、状態把握システムの導入を平成 29 年 7 月 29 日から実施した。入力された気づきデータは、45,335 件（平成 29 年 7 月 29 日～平成 30 年 3 月 2 日）となり、その間、6 回のフィードバック会議が開催された（図 3 参照）。なお、フィードバック会議は、介護者が気づきデータに関する知見を議論・共有する重要な機会であり、実装サイトである名護厚生園側との協議に基づき、1 ヶ月に一回程度の頻度での開催を実施した。定期的にフィードバック会議を開催できたことで、自立的な運用（活用）に向けての体制確立が図られた。

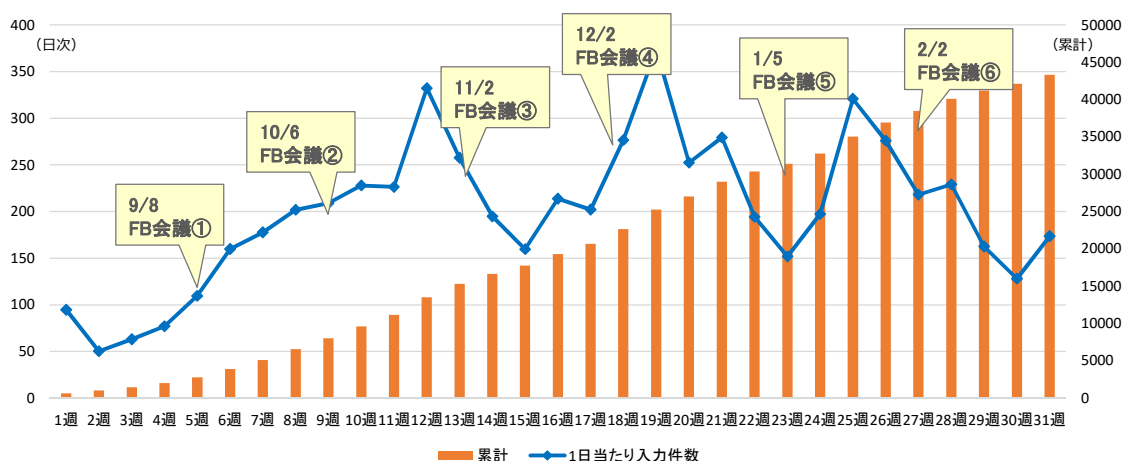


図 3：名護厚生園における1日当たり入力件数と累計数推移(平成29年7月～平成30年3月)

② 名護厚生園におけるアンケート・ヒアリングの実施

平成29年度の新規実装サイトである名護厚生園において、状態把握システムを利用する全介護者11名を対象に、第1回から第5回のフィードバック会議の際にアンケートを実施した。各回の主なアンケート項目を表に示す。

分類	アンケート項目	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
直近1か月の状態把握システムの入力について	入力は負担でしたか。	●	—	—	—	—
	端末の操作には慣れましたか。	●	—	—	—	—
	1日の中で、入力にかかる時間は平均してどれぐらいですか。	—	●	●	●	●

気づき項目の理解について	概念が理解しにくかった項目がありましたか。	●	—	—	—	—
	迷わず入力しやすかった項目はありましたか。	●	—	—	—	—
	入力に迷った項目はありましたか。	●	—	—	—	—
	気づき項目の理解が進み、入力しやすくなりましたか。	—	●	●	●	●
状態把握システム導入の影響・効果等	入力を通じて、気づきへの意識が高まりましたか。	●	●	●	●	●
	同じ利用者に対してでも、介護者間で気づきに違いがあると感じましたか。	—	●	—	—	—
	他の介護者の気づきについて理解することは、自身の介護に役立つと感じますか。	—	●	—	—	—
	利用者別気づきデータのグラフは、利用者の状態把握に役立つと感じましたか。	—	●	—	—	—
	状態把握システムを使って良かったと思うことがあれば、教えてください。	—	—	●	—	—
	状態把握システム導入以降、自分の行動が変わったなどと思う点はありますか。	—	—	—	—	●
	状態把握システム導入以降、周りの介護者の行動が変わったなどと思う点はありますか。	—	—	—	—	●
介護者間の話し合いについて	状態把握システムのデータ・グラフについて、入力を行っている現場スタッフ同士での話し合い時間はどの程度あるでしょうか。	—	—	—	●	●
	状態把握システムのデータ・グラフについて、入力を行っている現場スタッフ同士での話し合いの時間を今後どのようにしていきたいと思えますか。	—	—	—	●	●

表2：主なアンケート項目

ヒアリングは、上記アンケート対象となった名護厚生園介護者のなかから5名と、平成28年度の初期実装サイトの宮古厚生園の管理責任者（介護課長）と現場主任を対象に実施した。なお、名護厚生園でのヒアリングは、5名を一括して対象にしたグループインタビュー

一形式であった。ヒアリング項目を表に示す。

分類	ヒアリング項目
気づきデータ・グラフ等について	気づきデータに関する資料（フィードバック会議資料、利用者別データ、介護者別データ、データ分析ポイント）は、いかがでしたか。分かりやすかったですか。もっとこうしたら良い、といったコメントがあれば、教えて下さい。
	データやグラフは、どの程度使いましたか。必ずチェックするデータ・グラフはどれですか。逆に、あまり参照しないデータ・グラフはどれですか。
気づきデータ運用マニュアルについて	気づきデータ運用マニュアルは、いかがでしたか。分かりやすかったですか。もっとこうしたら良い、といったコメントがあれば、教えて下さい。
気づき 21 項目の信頼性・妥当性について	介護者間で評価値が違うことがありますか。
	どういった項目で違いが見られますか。
	違いに違和感を持つことがありますか。
	違和感があったら、どうしてそのような評価にしたのかについて説明を聞く機会がありますか。介護者間でディスカッションをしますか。
	説明やディスカッションを通じて発見したことがあればお聞かせ下さい。
入力に迷う項目はありますか。また、迷わず入力しやすいという項目はありますか。	
特定の気づき項目の値に着目して、介護者の行動を変えた結果、利用者の状態に改善が見られた事例があれば、お聞かせ下さい。	
状態把握システム導入以降、利用者の状態・行動に変化が見られた事例があれば、お聞かせ下さい。	
気づきの導入やフィードバック会議で、共有できたことはありますか。	

表3：名護厚生園でのヒアリング項目

アンケート・ヒアリングの実施結果は下記の通りであった。

a) アンケート

<直近1か月の状態把握システムの入力について>

入力の負担感について、当初は、半数弱の介護者が「まあまあ負担に感じた」と回答していた（図4）。主任やサブリーダーに確認したところ、介護者にとって理解しにくい気づき項目が存在し、その入力に時間が掛かっていることが一因となっていることが分かったため、フィードバック会議で当該項目等についての解説を重点的に実施したところ、1日あたりの入力件数が100件を超える水準で維持されながら（図3）、約9割の介護者の入力時間は20分以内に収まっていった（図5）。この結果から、フィードバック会議は、本来的には、気づきデータのグラフに基づくディスカッションを行う場であるが、導入後数か月間は、気づき項目の説明等、レクチャー的な要素を盛り込みながら実施することが効果的であると考えられる。今後の新規導入施設におけるフィードバック会議の運営に関する示唆が得られた。

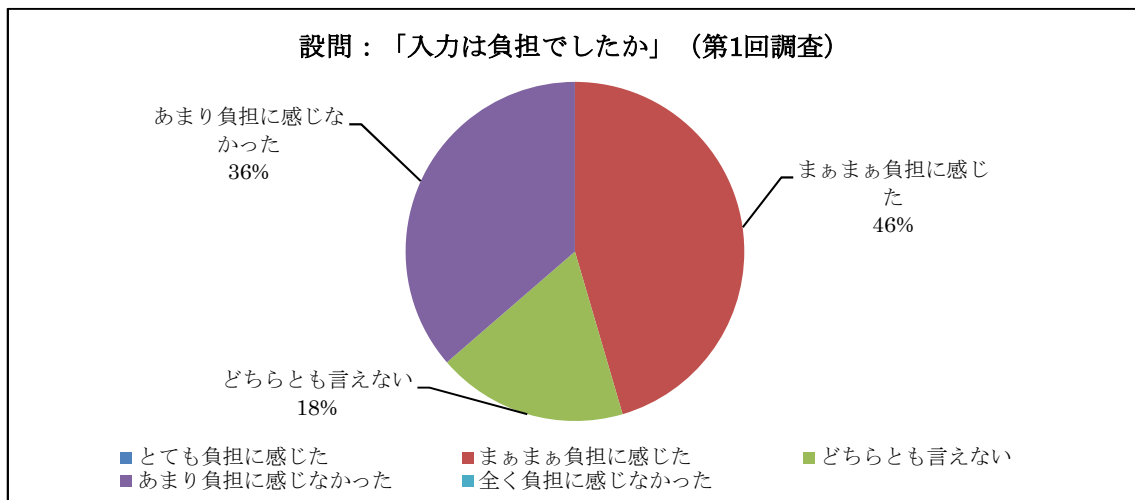


図 4：アンケート結果（第1回調査：入力の負担感について）

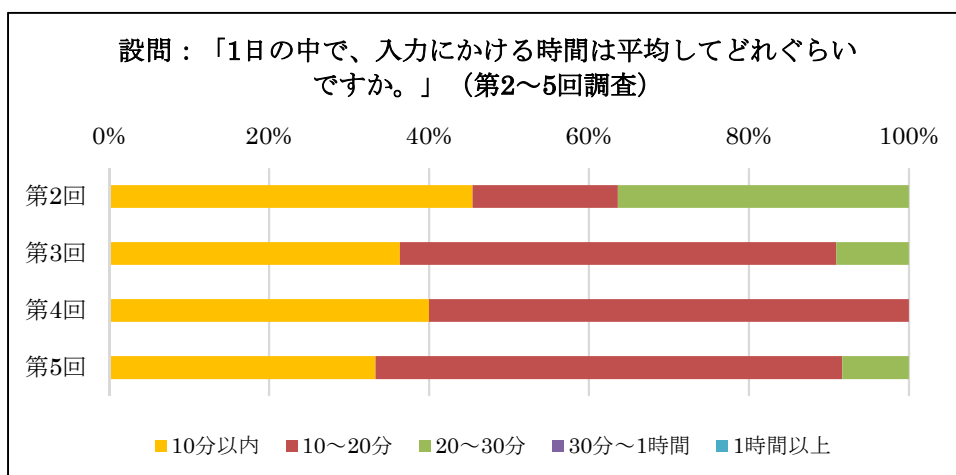


図 5：アンケート結果（第2～5回調査：入力時間について）

<気づき項目の理解について>

第1回アンケートでは、気づき項目（下表の21項目）の理解について、重点的に質問した。

分類	項目
気づき	表情、しぐさ、声、意欲
働きかけ	声かけ、触れる、思い出
ケア行動	介助、食事、入浴、排せつ、睡眠、歩行、車いす、身支度
社会性行動	交流、仕事、楽しみ、独り言、情報
洞察	洞察

表4：気づき21項目

名護厚生園では、状態把握システム導入時に、「導入説明会」を開催し、本取り組みに参加した介護者全員に対し、各気づき項目の定義について解説を実施した。21項目のうち、「思い出」、「情報」、「洞察」の3項目に関し、5名以上の介護者が、概念が理解しにくかったと回答しており、気づきデータ運用マニュアルの解説等の修正を実施した（図6）。なお、これら3項目は、「入力に迷った項目」として選択される傾向もみられた（図8）。この他、「介助」、「身支度」についても、「入力に迷った項目」として選択される傾向がある（図8）ことから、これら2項目については、気づきデータ運用マニュアルの解説を充実化するとともに、その後のフィードバック会議において意識的に理解度を確認するようにした。

「迷わず入力しやすかった項目」として、半数以上の介護者が、「表情」、「意欲」、

「声」、「声かけ」の4項目が選択されている（図7）。この結果は、個々の介護者の理解度を客観的に把握するものではないが、個々の介護者の差異を比較する際に着目する項目として活用することが期待される。

これら改善を踏まえ、第2回以降のアンケートにおいては「気づき項目についての理解が進み、入力しやすくなりましたか。」との質問を行ったところ、全ての回において、8割以上の介護者が「とてもしやすくなった」又は「まあまあしやすくなった」との回答が得られており、一定の改善効果があったことが推察される（図9）。

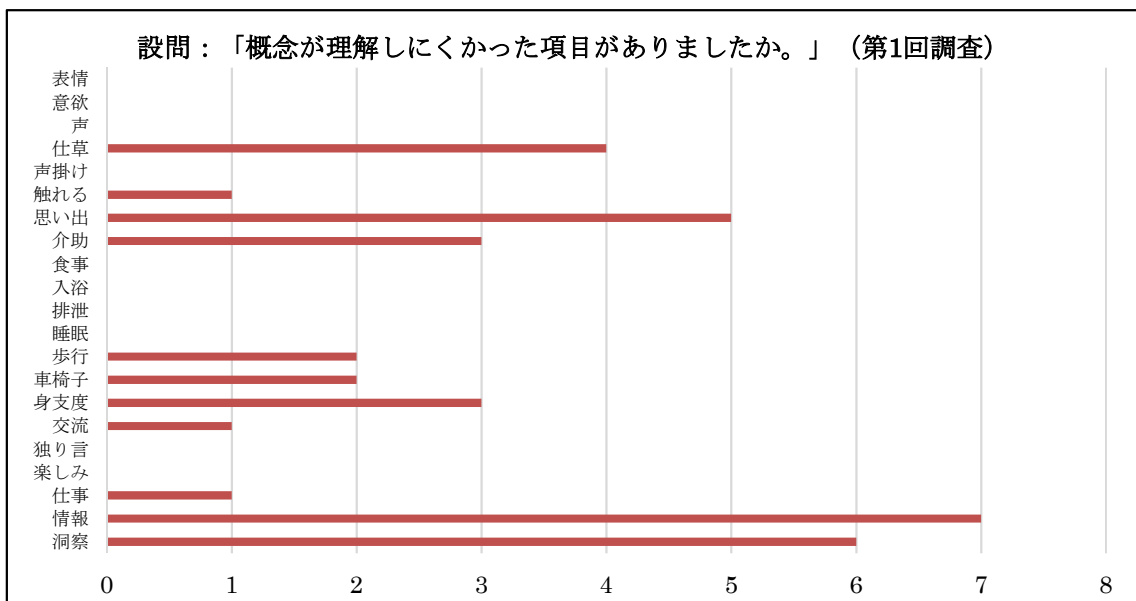


図 6：アンケート結果（第1回調査：理解しにくい項目について）

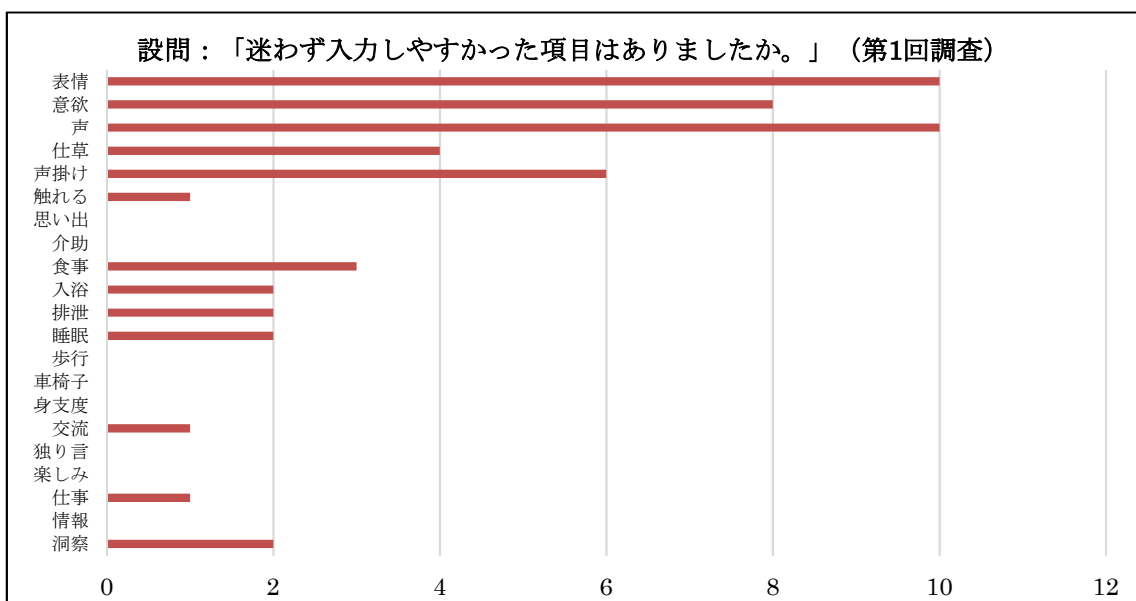


図 7：アンケート結果（第1回調査：入力しやすかった項目について）

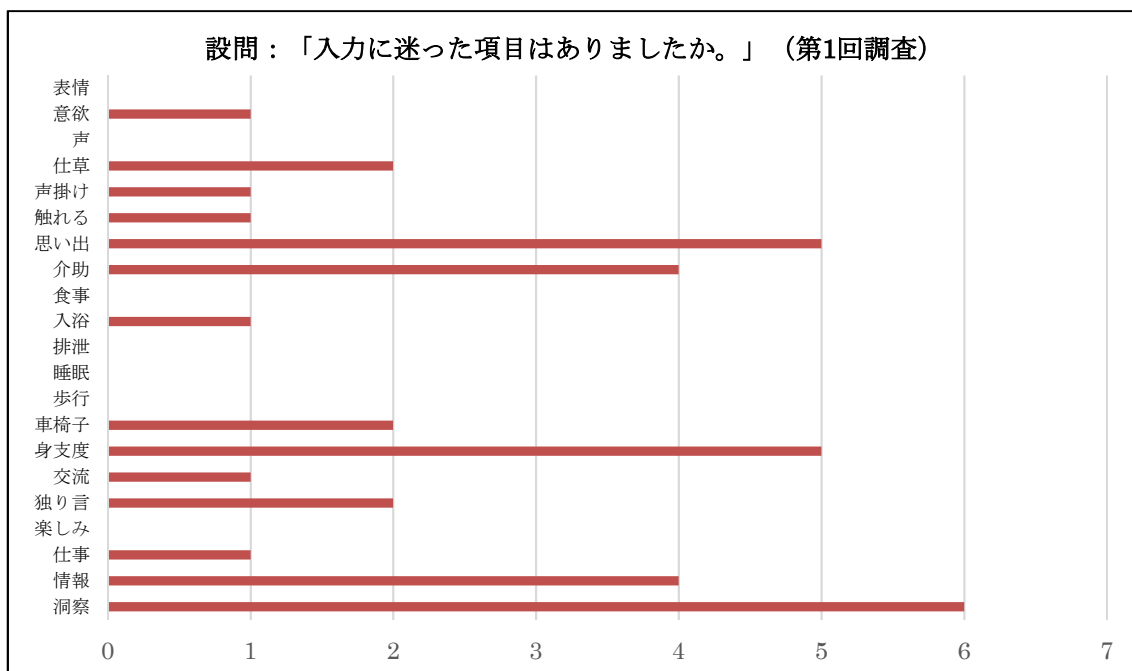


図 8：アンケート結果（第1回調査：入力に迷った項目について）

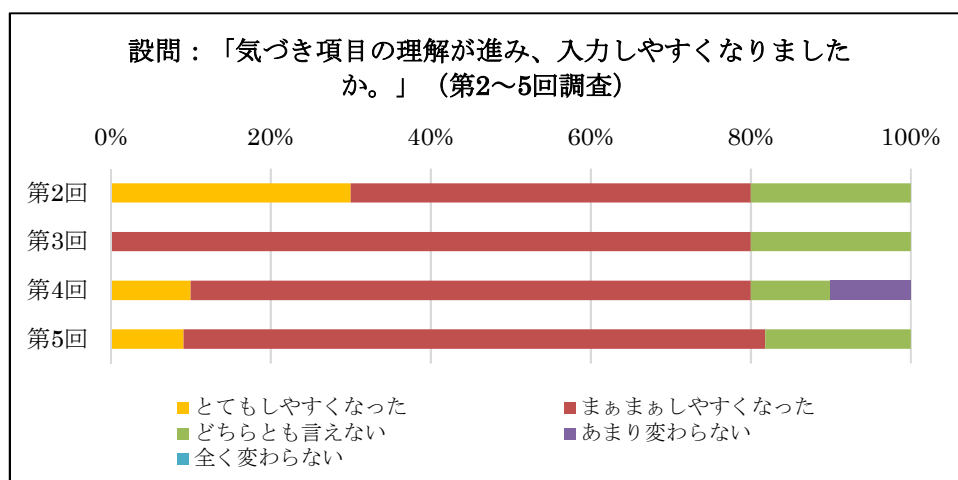


図 9：アンケート結果（第2～5回調査：入力しやすさについて）

<状態把握システム導入の影響・効果等>

状態把握システム導入により、介護者に意識面での変化があったことが推察される。具体的には、入力を通じた気づきへの意識が高まったかどうかという点については、「とても高まった」又は「まあまあ高まった」と回答した介護者が、6割を超えた（図10）。また、介護者間の気づきの違いについて、9割以上の介護者が、「とても感じた」又は「まあまあ感じた」を選択した（図11）。加えて、他の介護者の気づきについて理解することは自身の介護に役立つと感じている介護者（「とても感じる」又は「まあまあ感じる」を選

扱ったスタッフ)の割合も9割を超えた(図12)。

気づきデータのグラフが、利用者の状態把握に役立つと感じたかどうかについては、「まあまあ感じる」を選択した介護者の割合が全体の75%であった(図13)。

状態把握システムを導入して良かったこととしては、「以前よりも多くの人数の利用者様の状態変化に気づけるようになった」を選択した介護者が、8名にのぼった(図14)。

行動面の変化については、状態把握システム導入以降、自身の行動が変わったと回答した介護者の割合が55%、周りの介護者の行動が変わったと感じた介護者の割合が45%にのぼった(図15左・中)。どのように変わったかについては、「声かけを意識するようになった」、「日誌を細かく記載するようになった」、「ご利用者のご家族に対して日誌内容よりも細かい話ができるようになった」等が挙げられた。

ただし、行動変化により利用者の状態変化が見られたことがあったかについては、「ある」と回答した介護者の割合は2割弱にとどまった(図15右)。また、「ある」と回答した介護者へのヒアリングを実施したところ、利用者の状態変化の具体的な内容に関する説明は得られなかった。このアンケートを実施した第5回フィードバック会議は、状態把握システム導入から約5か月経過した段階である。利用者の状態変化を把握するためにどの程度の期間が有効であるかという点については、今後、その把握手法を含め検討していく必要がある。

これらの結果を踏まえ、平成30年度以降、気づきデータ運用マニュアルのさらなる充実を図っていきたい。

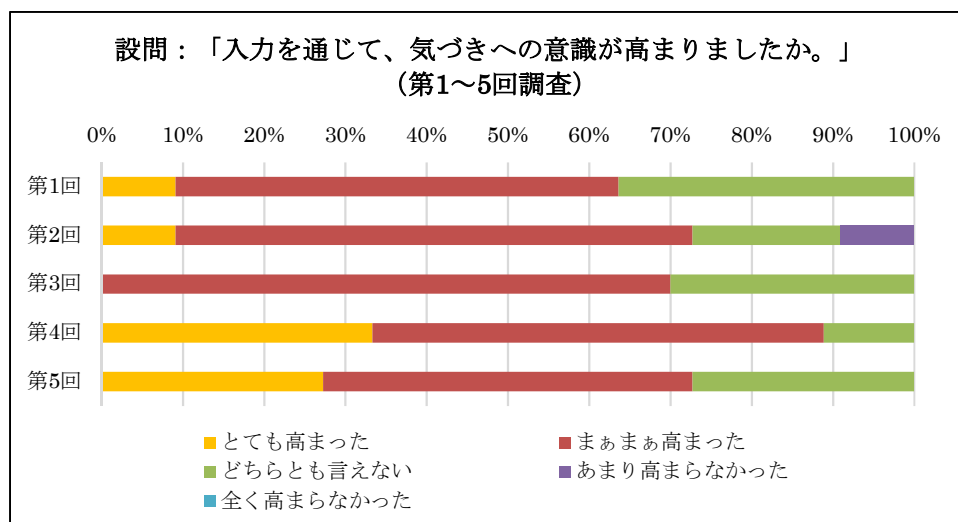


図 10：アンケート結果（第1～5回調査：気づきへの意識について）

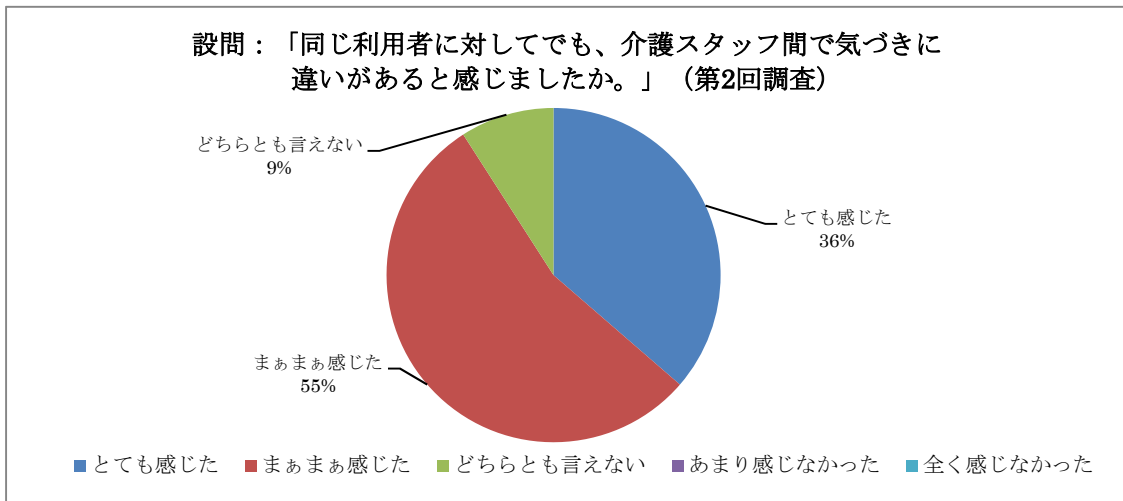


図11：アンケート結果（第2回調査：介護者間の気づきの違いについて）

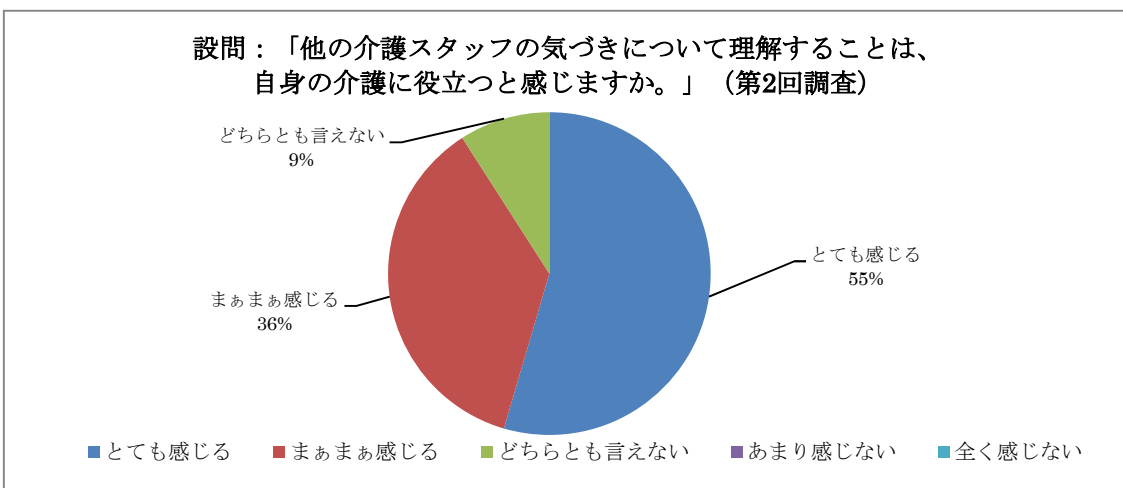


図12：アンケート結果（第2回調査：他の介護者の気づきの理解について）

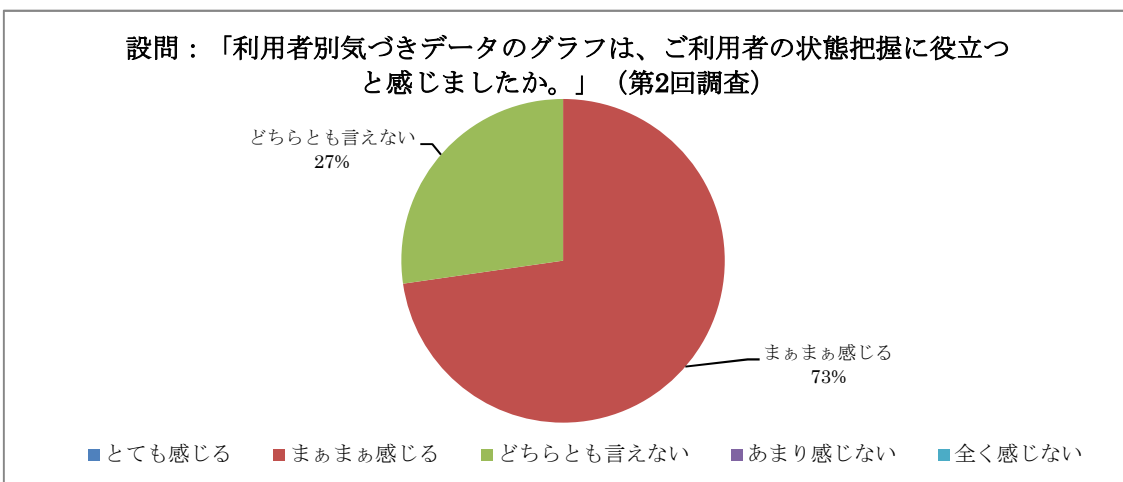


図13：アンケート結果（第2回調査：利用者の状態把握への役立ち度について）

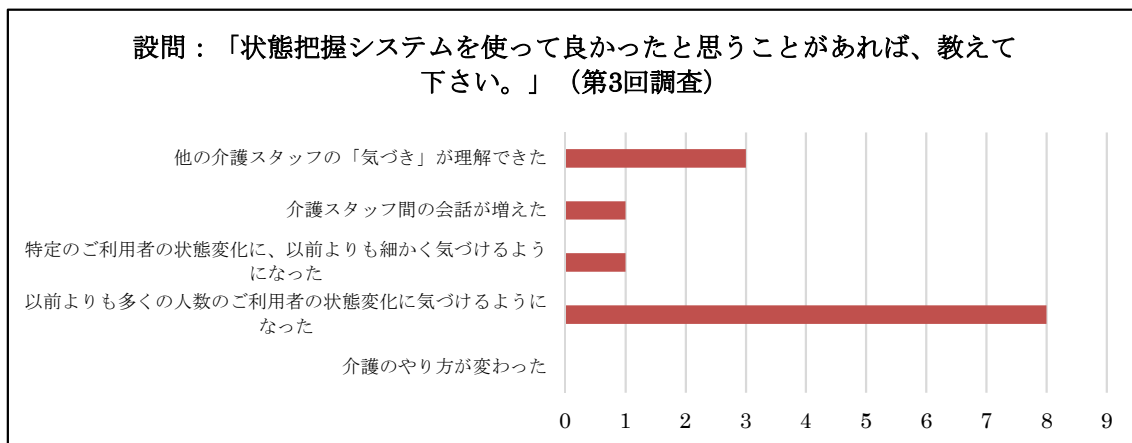


図 14：アンケート結果（第3回調査：状態把握システムを使って良かったことについて）

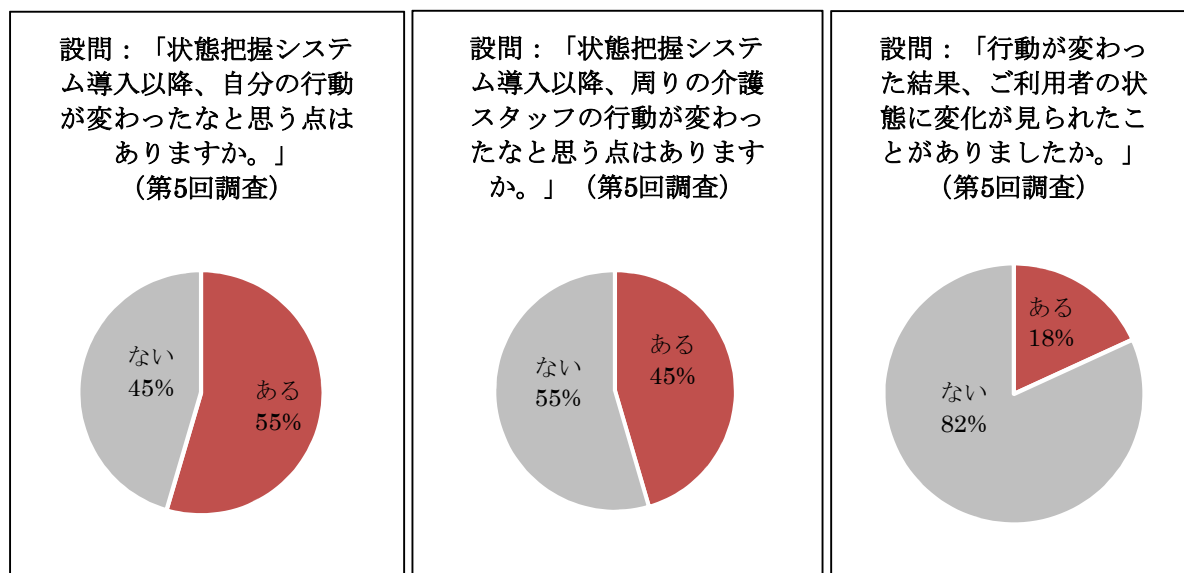


図 15：アンケート結果（第5回調査：状態把握システム導入後の変化について）

<介護者間の話し合いについて>

第1～3回のフィードバック会議において、現場リーダーとの議論で、状態把握システムの導入効果を大きくするためには、気づきデータに基づく介護者間の話し合いの重要性が論点となった。非常に重要であるとの指摘が現場リーダー等からあった。そこで、第4～5回のフィードバック会議の冒頭に、介護者間での話し合いを実施した。また、この結果を把握するために、この話し合いに関する調査を実施した。調査結果より、気づきデータに関する話し合いの時間が「あまりない」と認識し（図16）、話し合いの時間増加を期待する（「たくさん増やしたい」又は「少し増やしたい」）介護者が多数を占める結果が得られた（図17）。

ただし、多数の介護者が参加する話し合いの時間を確保することは、介護現場での実情

(業務が多岐に渡ること、勤務時間が各自異なる事など)を踏まえると難しい事から、少人数(2-3人)での話し合いの機会を増やすことを検討していくことが望ましい。

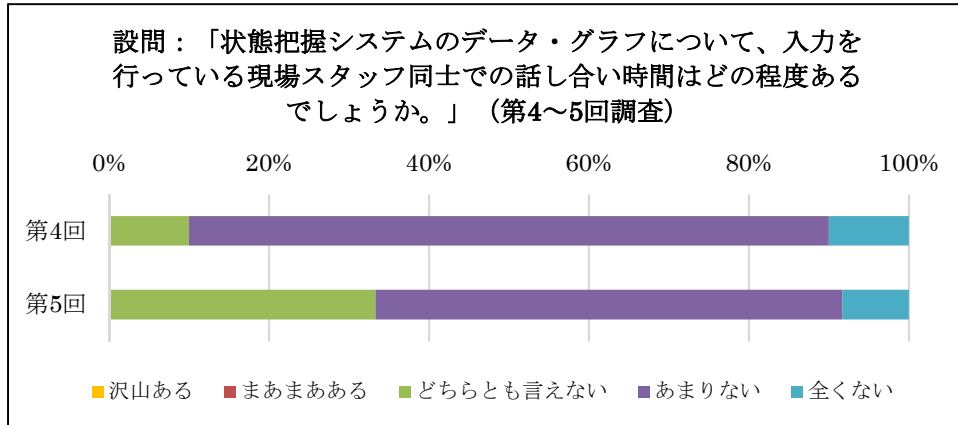


図16：アンケート結果(第4～5回調査：気づきデータの話し合いの時間について)

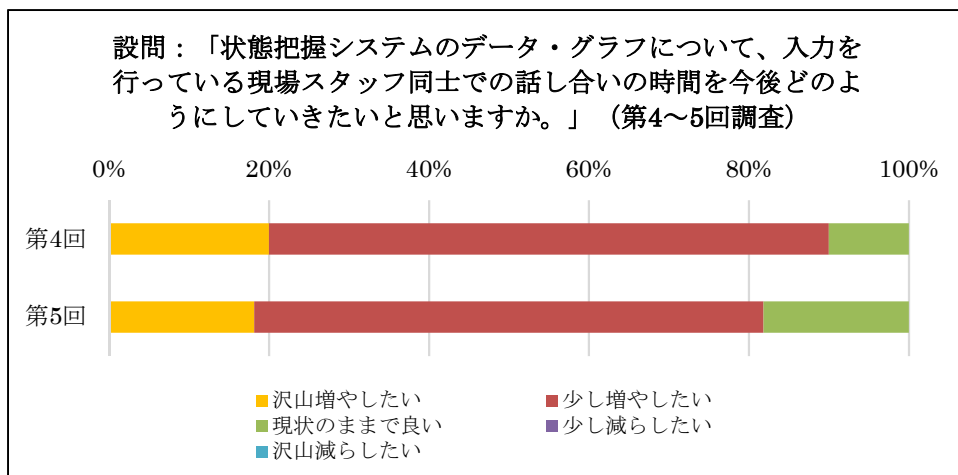


図17：アンケート結果(第4～5回調査：気づきデータの話し合いの時間の今後について)

b)ヒアリング

今年度取り組みを主に実施している名護厚生園に加え、昨年度取り組みを実施した宮古厚生園の2カ所においてヒアリングを実施したところ、以下の3点に関する示唆が得られた。

1) 気づきデータ・グラフの改善に関する示唆(名護厚生園)

グラフに関しては、現状のグラフを用いてある程度の把握が可能であるものの、項目によっては、より詳細な内容や異なる観点からの確認が出来るようにする事で、データをより効果的に利用することが出来るのではないかと指摘が得られた。具体的には、特定日の利用者様に関する気づきデータを集約したグラフは存在するが、そのグラフにおいて、

個々の気づき項目をどの介護者が入力したかが分かるようになると、「いつどのような時に当該データを入力したのか」等をフィードバック会議等でのディスカッションにおいて、介護者自身に確認することが可能となる。このことにより、議論が具体化し、どのような際にどのような気づき項目を入力し、どのような評価をなすべきかなど、状態把握システム導入効果が高まる事が期待される。この他、名護厚生園で従来から運用している「睡眠チェック表」・「体重表」などのデータと気づきデータの時系列での照らし合わせがしやすくなるような検討をしてはどうかという提案もなされた。これらの示唆を次年度の取り組みへと反映していく。

2) 気づきデータ運用マニュアルの改善に関する示唆（名護厚生園、宮古厚生園）

前述の名護厚生園におけるアンケート結果を踏まえ実施した「気づきデータ運用マニュアル」の改善効果に関するヒアリングを実施した。ヒアリングに際しては、名護厚生園に加え、昨年度の取り組み機関である宮古厚生園に対しても実施した。

具体的には、入力時に参照するための資料としてのわかりやすさが改善されたとの評価が得られたものの、やはり、導入当初時点で、気づきデータ運用マニュアルを読むだけで十分な理解をすることは難しく、フィードバック会議等においてマニュアルを用いながら具体的なユースケースに基づいた解説が必要であるとの指摘も複数あった。気づきデータ運用マニュアルを実際に利用して新規導入を行ったのは、名護厚生園が初めてである。これら指摘を踏まえ、マニュアルだけに頼るのではなく、早期にフィードバック会議等を用いた具体的な理解度向上に資する仕組みを検討していきたい。

宮古厚生園では、フィードバック会議のファシリテーターを担う現場主任に対して、ヒアリングを実施した。宮古厚生園の場合、状態把握システムを導入してから約3年が経過して定着が進んでいる段階である。定期的に行われているフィードバック会議の有用性は、ファシリテーターに依存している部分も多いことから、ファシリテーター自身が「気づきデータのグラフを読み解く力」を高める事の必要性を強く感じられており、当該部分を気づきデータ運用マニュアルで重点的に解説して欲しいとの意見が出された。意見を踏まえ、修正後の気づきデータ運用マニュアルを提供したところ、好意的なコメントが得られると共に、平成29年度末時点において、フィードバック会議におけるグラフの利用状況が改善しているとのコメントも得られた。

3) 気づき21項目の提示効果に関する示唆（名護厚生園）

集計した気づき項目は、各介護者の特性等が示されており、それらの多くは管理職側が把握していた内容と概ね一致しているのではないかとの意見があった。各介護者の癖や課題を、データにより定量的・視覚的に提示できることから、気づきデータを集計し、グラフ化して提示する事は、特に経験が浅い介護者には有用であるとの指摘もなされた。

③ 気づきデータ運用マニュアルの策定・改良

平成28年度の取り組み成果として作成した気づきデータ運用マニュアルを、平成29年度の名護厚生園における取り組みに適用し、その際いただいたコメント等を元に、表現に改善を要すると指摘された事項を対象に、解説文書の修正と、例示の追加を実施した。その結果、実装サイトにおいて実施したヒアリング等において、一定の改善が図られたとの評価を得た。

さらに、平成29年度の名護厚生園での取り組みにおいて得られた知見に基づき、同マニュアルに、新たなセクション（「実際に気づきデータを見てみよう」）の素案を作成し、この素案についても、今年度の取り組み内で実施したアンケート・ヒアリングにおいて内容の検証を行い、その結果を踏まえて改良を実施した。新規作成セクション（「実際に気づきデータを見てみよう」）は、フィードバック会議等で用いられる図表の解釈手法について例示と解説をまとめたものであり、フィードバック会議の効果的な運用に資することが期待できるコンテンツである。

④ 気づき項目の信頼性・妥当性の検証

名護厚生園において入力された気づきデータを解析し、気づき項目の信頼性・妥当性に関する検証を実施した結論として、以下の2点が挙げられた。

第一に、複数の介護者が判断した利用者の状態は、利用者の真の状態に近いと考えられる、という点である。特に、利用者の状態が悪い場合には多数の介護者が「悪い」という判断をしている。

図 18 は、上段のグラフがその日のご利用者利用者に対する介護者の気づきスコア（とても良い：2、良い：1、普通0、悪い：-1、とても悪い：-2）として一日毎に介護者毎の合計値を算出し、かつ全期間で標準化（平均が0分散が1になるよう変換）した値を日毎に合計して表示している。当該利用者についての気づきスコアの合計値と、下段グラフの“当該利用者について入力した介護者数”を対比すると、複数の介護者が利用者の状態を同じように見ている傾向が見られ、利用者の状態が悪い時には、特に多くの介護者が入力をしていることが分かった。介護者が主観的に入力しているスコアであるが、複数の介護者が判断した状態を合わせて見ることにより、利用者の真の状態把握を行う事が可能と推定される。

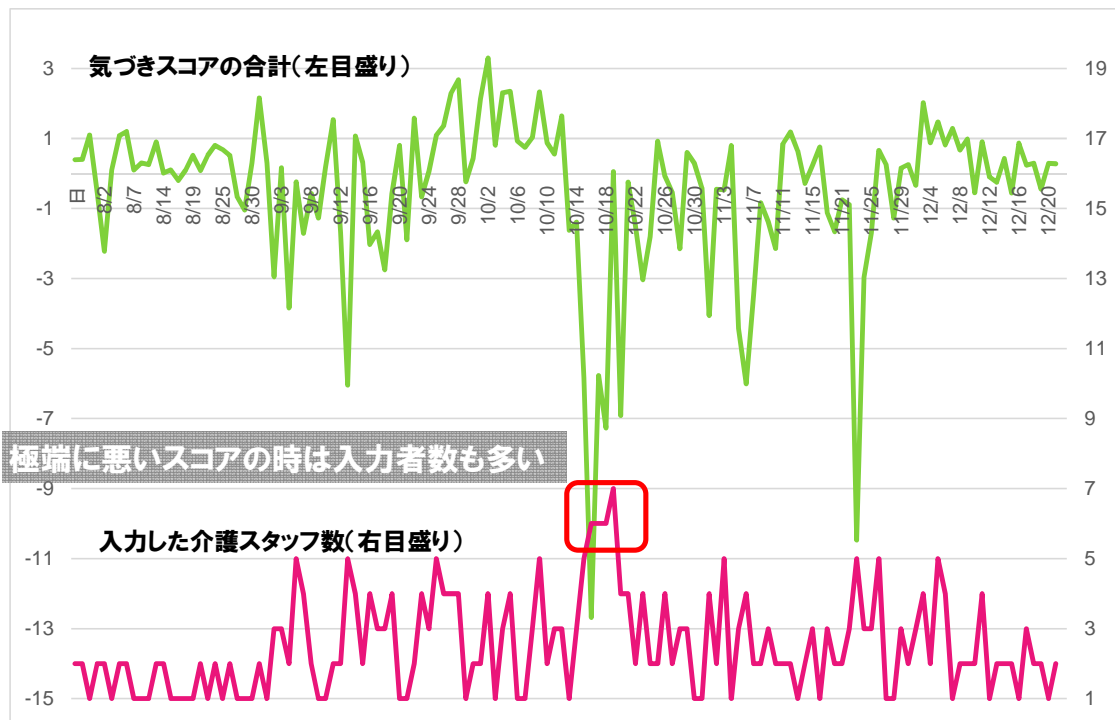


図 18 : 気づきスコアの合計値と入力した介護者数の推移 (平成 29 年 7 月～12 月)

第二に、状態把握システムを継続的に運用することで、介護者が利用者の状態を把握する能力が高められている、という点である。

介護者を、経験年数等により相対的に習熟度が高いと評価できるグループ A と、それ以外のグループ B に分けて、特定の利用者についての気づきスコアのグループ間の差異を分析したところ、図 19 のように、状態把握システム導入当初はグループ間で大きな違いが見られたが、運用期間が経過するとその違いが徐々に収束していったことが確認できた。介護に習熟していない介護者が、状態把握システムの運用を通じて利用者の状態観察を続けていくことによって、利用者の状態を観察する能力が習熟し、利用者の真の状態を入力できるようになっていったと考えられる。

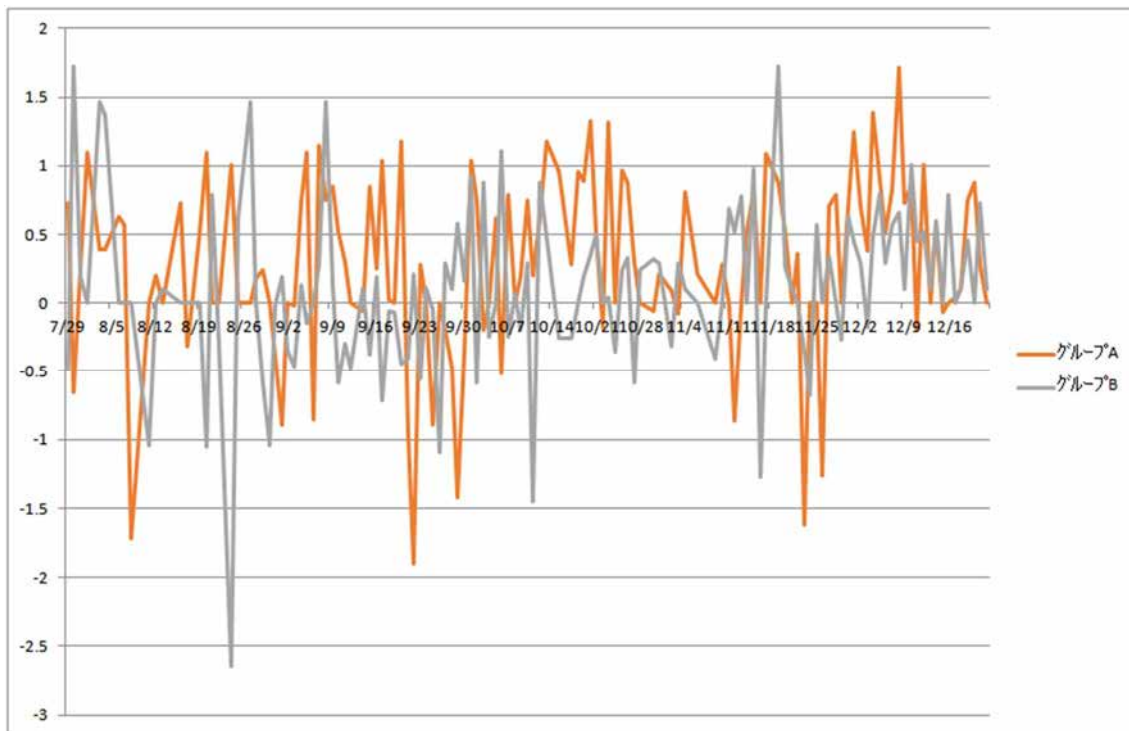


図 19：グループ A とグループ B の気づきスコアの推移（平成 29 年 7 月～12 月）

《平成30年度》

平成30年度は、状態把握システムの継続運用に向けた体制の確立と効果検証、沖縄県外への展開、「気づきデータ運用マニュアル」の効果検証、並びに、実装成果取りまとめ着手を目的とし、以下5点実施した。

① 名護厚生園における効果検証

a) 定着度合いの検証

平成 29 年度に状態把握システムを導入した名護厚生園において、利用者 27 名（A グループの全利用者 24 名+B・C・D グループ各 1 名）、介護者 38 名（A～D グループの全介護者 計 36 名+主任 2 名）を対象に、平成 30 年 8 月 1 日より状態把握システムの利用を開始し、定着度合いについて検証を実施した。入力された気づきデータは、32,045 件（平成 30 年 8 月 1 日～平成 31 年 2 月 23 日）となり、気づきデータを使ったフィードバック会議は、6 回実施された。

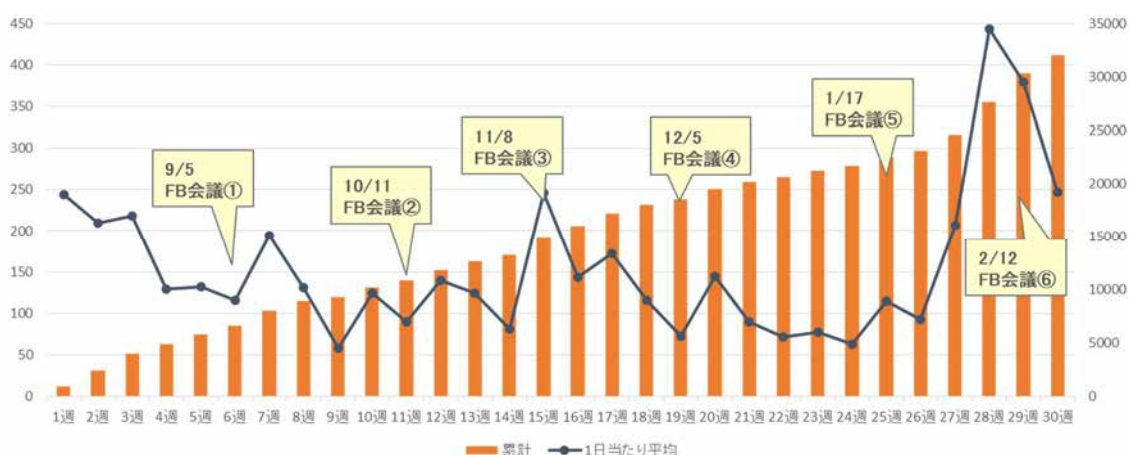


図 20：名護厚生園における 1 日あたり入力件数と累計数推移（H30 年 8 月～H31 年 2 月）

期間を通して 1 日当たりの入力件数に増減はあるものの、継続して一定数以上の入力を実施された。また、平成 29 年度の実装支援（フィードバック会議のアジェンダ作成やファシリテーション等）期間を経て、平成 30 年度は、各グループのリーダーを中心に、自律的にフィードバック会議を開催しており、状態把握システムの主体的活用が進んだ。

また、現場管理者より、状態把握システムの利用を通じて、若手の介護者が先輩介護者に積極的に質問に訪れるようになったという報告があった。介護者同士のコミュニケーションツールとしての効果も現れており、人材育成にも繋がる示唆が得られた。

b) ピックアップ入力による導入

名護厚生園は前年度の A グループに加え、B・C・D グループにも状態把握システムを追加導入したが、B・C・D グループは A グループとは異なり、対象利用者を 1 名のみに絞る入力方式（以下、「ピックアップ入力」）による導入を試みたため、ピックアップ入力の長所短所について、アンケートおよびヒアリング結果を通して検証した。

ピックアップ入力を試みたのは、多くの介護施設が人手不足の問題を抱えている現状を踏まえ、導入初期においては、まずは介護者の入力負担を軽減し、状態把握システムを無理なく利用することで、よりスムーズな導入に繋がるケースがあるのではないかと考えたためである。ピックアップ入力についての長所短所を検証するためにアンケートおよびヒアリングを実施（アンケートは、多くの介護者が自身の入力スタイルを確立する導入 3 ヶ月後に実施）した。

【長所】

確認できた長所は、主に以下の二点であった。

まず、入力の負担感の軽減である。1 日の中で入力にかかる時間については、ピックアップ入力では「10 分以内」が 100%なのに対して、フル入力では「10 分以内」は 22%と少なく、「10～20 分」が 56%と最も多かった。入力に対する負担感については、フル入力では「とて

も負担に感じた」が 40%、ピックアップ入力では「とても負担に感じた」は 4%のみであった。当然の結果ではあるが、ピックアップ入力はフル入力に比べて、介護者にかかる負担感は軽減されていた（図 21）。

もう一つの長所は、「気づき」への意識と、気づきデータ・グラフについてディスカッションするフィードバック会議の役立ち感の向上である。アンケート結果によると、気づきへの意識の高まりについて、ピックアップ入力では「とても高まった」4%、「まあまあ高まった」56%なのに対して、フル入力では「とても高まった」は 0%、「まあまあ高まった」は 22%にとどまった。また、フル入力では、まだグラフに慣れていない導入初期は、情報が多すぎてフィードバック会議の議題がまとまらないことがあるが、ピックアップ入力では、議題がわかりやすく話し合いが充実する。「フィードバック会議の内容が今後の介護に役立ちそうですか」という設問に対して、ピックアップ入力では 80%の介護者が「まあまあ役立つと思う」と回答した（図 22）。介護者全員が同一の 1 名の利用者に対して入力をするため、見るポイント、話すポイントがクリアになり、システム導入の理解が深まりやすく、「気づき」への意識が高まりやすいためであると考察される。

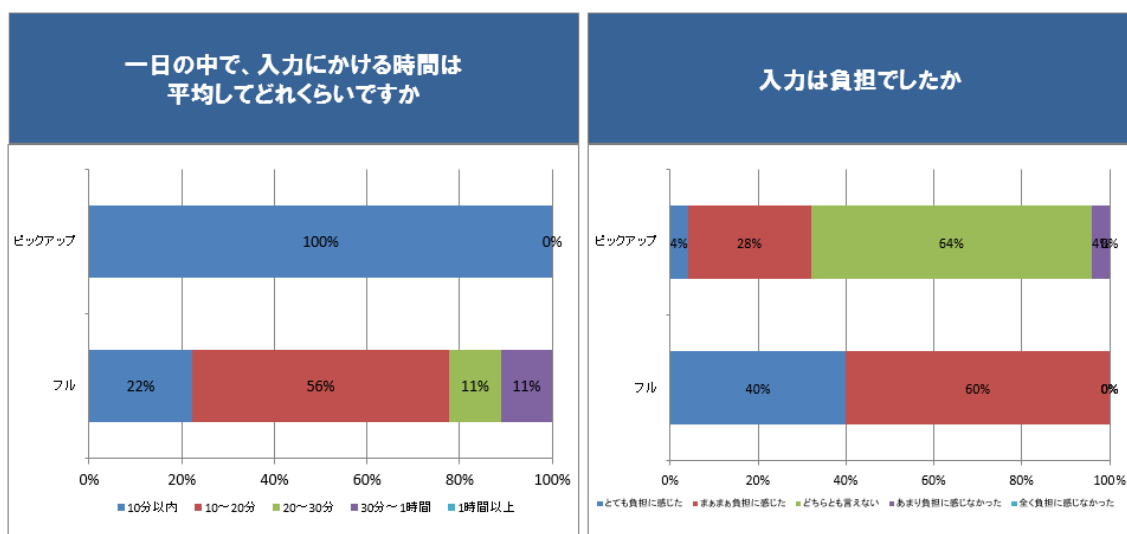


図 21：名護厚生園アンケート結果（第 3 回調査：入力にかかる時間・入力の負担感）

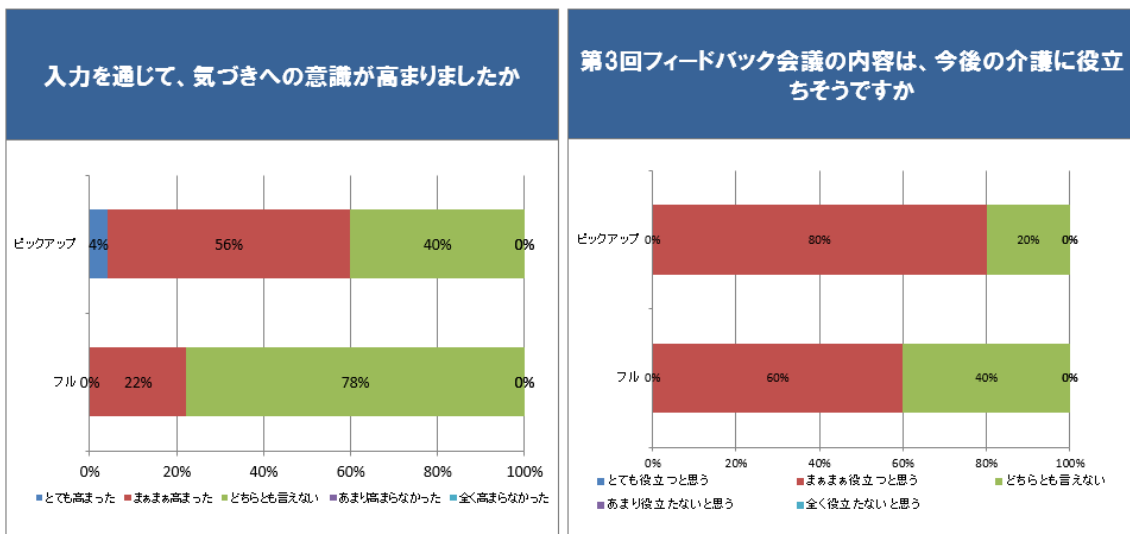


図 22：名護厚生園アンケート結果（第 3 回調査：気づきへの意識・FB 会議の役立ち感）

【短所】

短所としては、入力対象となる利用者が 1 人のみになってしまうことによる情報量の制約が挙げられる。介護者の視野の広さ（何人の利用者を見られているか）や、利用者間での入力の差異は「見える化」されない。従って、「『見ているつもりだったが実は見られていなかった』こと、『見える化』ができなくなってしまう。

また、ヒアリングでは、「入力対象の利用者に注目することに伴い、それ以外の利用者をしっかりと見られなくなってしまうのではないかと懸念される」という意見も聞かれた。

上記の通りピックアップ入力について検証した結果、導入初期段階においては介護者の負担を軽減できるピックアップ入力も効果的であること、しかし、状態把握システムの効果を最大限導出するためにはフル入力での実装とすべきであることが明らかとなった。そのため、当初はピックアップ入力での導入し、その後、フル入力に移行する実装パターンが効果的ではないか、との仮説が得られた。新規導入施設への実装円滑化に向けた示唆が得られた。

② 明風園への状態把握システムの新規導入と効果検証

「他地域への展開」として、社会福祉法人群馬県社会福祉事業団・明風園に対して状態把握システムを導入した。明風園の利用者 54 名（ショートステイ利用者 19 名を含む）、介護者 23 名（施設管理者 3 名、作業療法士 1 名を含む）を対象に、平成 30 年 8 月 1 日から利用を開始した。入力された気づきデータは、11,143 件（平成 30 年 8 月 1 日～平成 31 年 3 月 1 日）となり、その間、6 回のフィードバック会議が開催された（図 23）。



図 23：明風園における 1 日あたり入力件数と累計数推移（H30 年 8 月～H31 年 3 月）

明風園は、フル入力でスタートしたが、深刻な介護者不足の上に介護者の病欠も相次いだため、当初の想定よりも負担感が大きくなってしまい、状態把握システムの浸透に困難が見られた。そこで、施設側と協議しピックアップ入力を取り入れたところ、介護者の負担感が軽減される一方で、対象となる利用者に対しての入力データ量が増加したことで、フィードバック会議でも充実した話し合いを実施することができた。このことから、前述したとおり、ピックアップ入力で導入し、その後、フル入力に移行する実装パターンが効果的であると考えられる。

明風園における導入効果として、以下の二点があげられる。

第一に、洞察コメントの入力が充実し、介護者間で情報共有がはかられた点である。従前は、洞察コメントの入力はできなかったが、平成 30 年度は、「洞察」の気づきに対してコメントを入力できるようにした。これは、平成 29 年度までの実装支援の中で介護者から出た「備忘のためにも、情報共有のためにも、洞察にはコメントを入力したい」という声に応えたものである。明風園では、洞察コメントが多数入力され、日々の業務の中で、またフィードバック会議の中で、介護サービスの質の向上に繋がる情報が介護者間で共有された。

第二に、新人介護者が、他介護者の「気づき」を共有することで、利用者の変化に少しずつ気づけるようになった点である（図 24）。

介護者Aさんの入力（1ヶ月目）



介護者Aさんの入力（2ヶ月目）



図 24：新人介護者 A さんの入力の変化

図 24 は、新人介護者 A について、導入 1 ヶ月目と 2 ヶ月目の入力を比較したものである。1 ヶ月目はほとんどが「普通」（緑色）だが、2 ヶ月目は「とても良い」「良い」「悪い」の入力もできるようになった。1 ヶ月の入力後、状態把握システムによって見える化された他介護者の「気づき」を共有し、フィードバック会議等で話し合うことで、利用者の変化に気づくことができるようになった。状態把握スキル向上の効果が確認できた。

③ 気づきデータ運用マニュアルの効果検証

平成 29 年度に名護厚生園で実施したヒアリング結果を踏まえて改良したマニュアルについて、効果を検証した。平成 29 年度版マニュアルからの改良点は二点あった。

一点目は、気づき項目に関する解説文章の詳細化である。状態把握システムを活用するには各気づき項目を理解した上での入力が求められるが、21 に及ぶ気づき項目すべてを理解する事に時間を要したり、把握しきれないといった事態が生じていた。そこで、マニュアル内の文章を追記した。その結果、新規導入の明風園におけるアンケートで、「気づき項目について理解でき、入力しやすかったですか」の問いに対し、「まあまあしやすかった」の回答割合が回を重ねるごとに増加した。また、第 4 回目（第 4 回フィードバック会議後アンケート）では「とても入力しにくかった」の回答はゼロであった（図 25）。

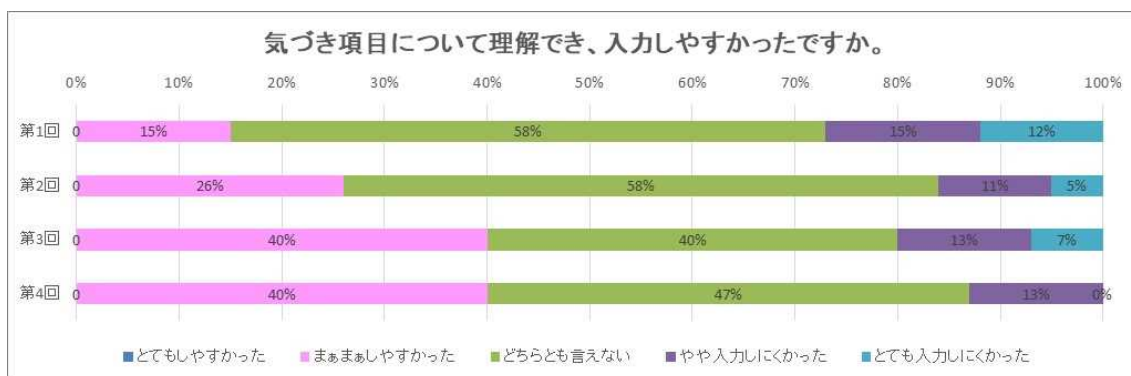


図 25：明風園アンケート結果（第 1～4 回調査：気づき項目の理解）

「項目に迷ったときはマニュアルを読み返した」という意見も聞かれ、項目を理解する上で、気づきデータ運用マニュアルは効果的であると考えられる。また、気づき項目は、入力を進める中で理解が深まることがわかった。

二点目の改良は、気づきデータ・グラフの読み方について詳しい解説を追加し、また、ファシリテーションでも活用できるよう、グラフの着眼点についても例示と解説を加えた点である。明風園において、初めて気づきデータ・グラフを見る第 1 回フィードバック会議後にアンケートを実施したところ、気づきデータ・グラフの読み方について「とても理解できた」が「17%」、「まあまあ理解できた」が「83%」となり、マニュアル改良の効果が認められた（図 26）。

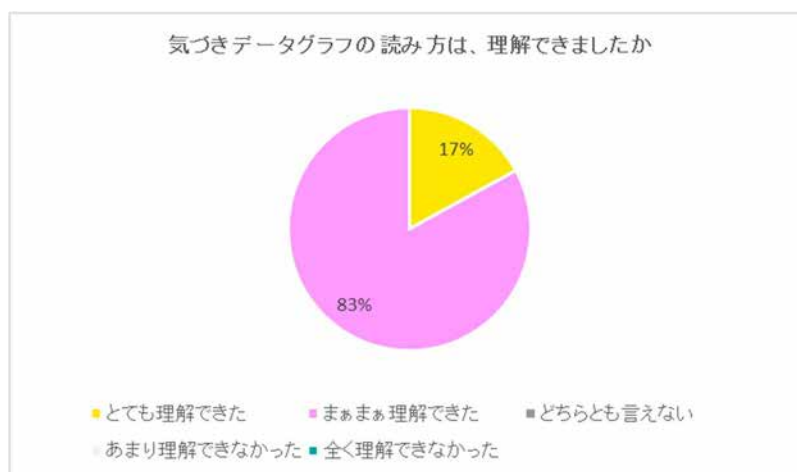


図 26：アンケート結果（第 1 回調査：気づきデータ・グラフの読み方の理解）

④ 気づきデータ運用マニュアルの改良

平成 30 年度の取り組みを踏まえ、気づきデータ運用マニュアルのさらなる改良点を検討した。具体的には、以下 a～c の三点であり、平成 31 年度にその対応を実施した。

a) ピックアップ入力方式による導入に関する記載内容の追記

前述の通り、ピックアップ入力による導入効果が認められた事を踏まえ、現在の気づきデータ運用マニュアルに、ピックアップ入力について、その利点や注意点、ピックアップ入力による導入後、フル入力に移行することの重要性などの記載内容を追記する。

b) ベテラン介護者向けページの作成

介護経験が長いベテラン介護者は、介護経験が少ない介護者と比較して、状態把握システム導入の意義についての理解は迅速であり、気づきデータ・グラフやフィードバック会議の意義や活用方法についても的確に理解されている事が伺えた。この点を踏まえ、導入初期段階にベテラン介護者に取り組み内容についての的確かつ迅速に理解していただく事を念頭に、ベテラン介護者が、経験年数の少ない介護者に説明をする際に教材となるようなページの作成に取り組む。

c) 事例集の作成

状態把握システムの活用方法や導入効果に関する理解度向上等を見据え、これまでの取り組みから得られた、気づきデータの活用事例や洞察コメント例、状態把握システム導入に伴う効果例などが掲載された事例集を作成する。

⑤ 実装成果取りまとめへの着手

実装成果取りまとめに向け、以下の取り組みを実施した。

a) 厚生労働省との協議

厚生労働省老健局へ、本取り組みに関するプレゼンテーションを実施し、今後の方向性について協議した。老健局より、介護者のスキル向上に資することが期待される本取り組みについて、全般的に非常に好意的なコメントが寄せられた。さらに、現状の介護関連の情報システムが、個々バラバラのデータ項目となっており、本取り組みにおいても連携する情報システム毎に連携ソフトウェアを新たに構築する状態が、現状の介護分野におけるデータ活用時の弊害となっている現状を踏まえ、これら情報システムを連携させるデータプラットフォームの構築を検討中であり、そのプラットフォームと本取り組みとの連携が、今後の全国展開に際しては、望ましいという点で合意した。

《平成31年度》

平成 31 年度は、実装サイトにおける状態把握システムの自律的な運用体制の確立、並びに、今後の社会実装に向けて、課題を整理し、道筋を立てることを目的とし、以下 4 点実施した。

① 明風園における効果検証

平成 30 年度新規実装サイトである明風園について、今まで実施してきた現場支援・研修指導

を踏まえ、状態把握システム導入の効果を検証した。

a) 定着度合いの検証

明風園の利用者 35 名、介護者 16 名（作業療法士 1 名を含む）を対象に、平成 30 年度に引き続き状態把握システムを利用した。状態把握システムに入力された気づきデータは、6,566 件（平成 31 年 4 月 1 日～令和元年 9 月 14 日）となり、5 回のフィードバック会議が開催された（図 27）。

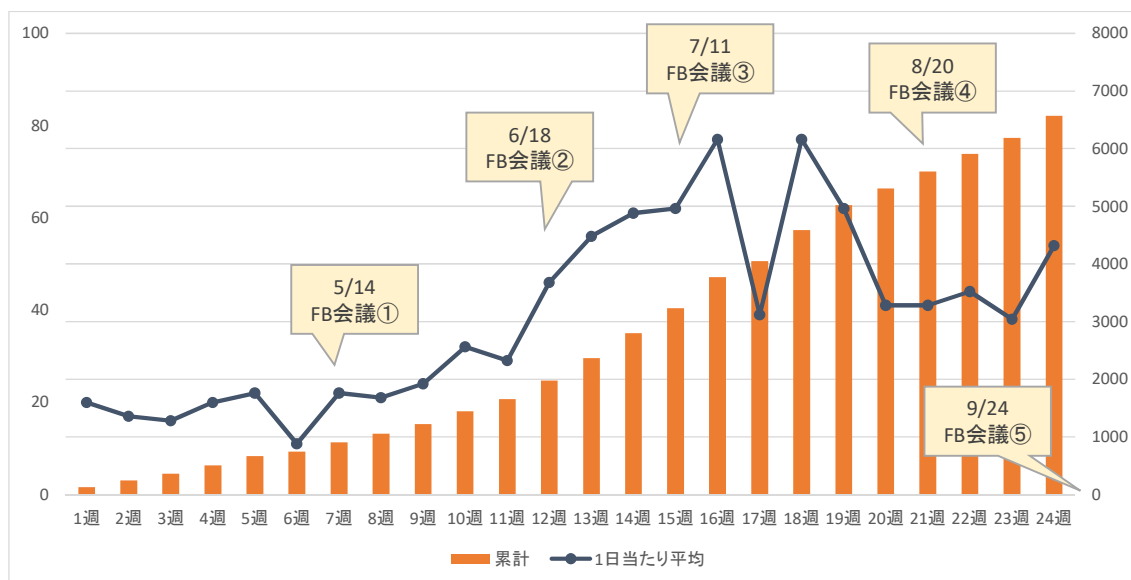


図 27：明風園における 1 日あたり入力件数と累計数推移（平成 31 年 4 月～9 月）

4、5 月は、介護者の異動などの影響もあり現場に大きな変化が生じる時期である。状態把握システムについても、初めて利用する介護者がいるため、概念や操作方法について、一から教える必要があり、その影響で、この時期の入力件数は少なくなっている。しかし、「気づきとは」の概念や、状態把握システムを利用したサービスの質の向上について、平成 30 年度から利用してきた介護者が、自らの経験も踏まえて、今年度初めて利用する介護者へ説明を実施することで、全体としてより理解が深まったと考えられる。6 月以降は、積極的な入力が見られ、継続して一定数以上の入力を実施されている。また、平成 30 年度の実装支援（フィードバック会議のアジェンダ作成やファシリテーション等）期間を経て、平成 31 年度は、本事業のリーダーを中心に、自律的にフィードバック会議を開催し活発な意見交換が行われるなど、状態把握システムの自主的な活用が進んでいる。

明風園の管理者からは、「気づきの視点を、人材育成に役立てるということは有効だと思う。新人職員が途中で退職したので、当人の成長の結果を出せたわけではないが、退職までの入力データからは、新人職員とベテラン職員との気づきの差が明らかに出ていた。状態把握システムを有効に使うことによって、技術を教える事とは別の教育（育成）ができるのかな、と思う。」

という意見が聞かれた。

b) ピックアップ入力による運用

明風園では、平成 30 年度の途中から導入した、入力対象を利用者数名に絞る「ピックアップ入力」を平成 31 年度も継続した。

ピックアップ入力は、「入力の負担感の軽減」と『『気づき』への意識と、気づきデータ・グラフについてディスカッションするフィードバック会議の役立ち感の向上』という長所が昨年度実証されたが、逆に、短所として、「入力対象の利用者が絞られることによる情報量の制約」が挙げられていた。つまり、介護者の視野の広さ（何人の利用者を見られているか）や、利用者間での入力の差異が「見える化」されないのである。そのため、状態把握システムは、ピックアップ入力で新規導入した後、対象の利用者の幅を広げる（最終的には、全利用者を対象とする「フル入力」に移行する）形で利用を継続すると効果的であると考えられる。

明風園では、平成 30 年度は 3 人の利用者を対象にしており、平成 31 年度も同じく 3 人でスタートしたが、明風園からの申し出により、7 月からは対象者を 5 人に増やした。ピックアップ入力の長所を生かしながらも、少しずつ、「視野の広さ」や「利用者間での入力の差異」にも目を向ける方向に進んだ形だ。また、ピックアップ対象者を増やすことについて、実装サイトからの申し出があった点は、状態把握システムの自律的運用に向けた成果と捉えられる。

② 気づきデータ運用マニュアルの効果検証

平成 30 年度に名護厚生園および明風園で実施したマニュアルについてのヒアリング結果を踏まえて、以下 a~c の改良を加え、改良版のマニュアルについて、実装サイトにおいてその効果を検証した。

- a) ピックアップ入力方式についての説明ページの作成
- b) ベテラン介護者（ファシリテーター）向けページの作成
- c) 具体的な事例掲載ページの作成

上記三点の改良を加えた気づきデータ運用マニュアルについて、名護厚生園および明風園において、ヒアリングを実施したところ、改良されたことでより分かりやすくなり、状態把握システムについての理解が深まったとの意見が大半であった。特に、b) ファシリテーター向けページについては、「フィードバック会議を実施する意図がきちんと記載されていてわかりやすい。データを見ることが目的なのではなく、利用者の状態や今後のサービスについて、データを参考にしながら共有し、検討する場であるということを徹底したい。」「フィードバック会議を仕切るリーダーも年度ごとに変更があるので、ファシリテーター向け資料がマニュアルに追加されるのはとても良い。参考にしていきたい。」など、状態把握システムを活用する上で重要であるフィードバック会議の自律的運用に向けて、今回のマニュアル改良が効果的であると考えら

れる知見が得られた。

③ 気づきデータ運用マニュアルの完成

上記②を踏まえ、改良版マニュアルについて、実装サイトの介護者に対してヒアリングの実施し効果を検証できたことで、「気づきデータ運用マニュアル」の完成とする。今後の状態把握システムの新規導入、並びに、導入施設での自律的な運用の際に、大いに活用が期待される。

④ 本事業の実装成果のとりまとめと今後の社会実装に向けての検討

気づきデータに関する取り組みについての知見を有する鳥取県米子市の「社会福祉法人こうほうえん」、今回の実装サイトが参加する全国組織である「全国社会福祉事業団協議会」、並びに介護記録ソフトの大手ベンダー等と、全国展開の際のサポート体制の確立等、今後の持続的なサービス提供についての協議を実施し、令和2年度（2020年度）からの持続的なサービス提供体制を確立する予定である。

3. 実装活動の成果

(1) 目標達成及び実装状況

【実装支援期間終了時の目標（到達点）】	【実装状況】
<p><u>2 都道府県での実装</u></p> <p>✓初年度は沖縄県で実装、2年目は同地域（沖縄県）で新規実装、3年目は他地域で新規実装</p>	<p><u>2 都道府県での実装</u></p> <p>✓初年度は、沖縄県・宮古島市・宮古厚生園において実装 ✓2年目は、沖縄県・名護市・名護厚生園において新規実装 ✓3年目は、群馬県・前橋市・明風園において新規実装</p>

① 沖縄県・宮古島市 宮古厚生園

a) 平成28年度

- ・対象介護者数：24名
- ・対象利用者数：70名
- ・「気づき」入力期間：平成28年1月～平成29年3月
- ・「気づき」入力件数：83,967件

② 沖縄県・名護市 名護厚生園

a) 平成29年度

- ・対象介護者数：11名（Aグループの介護者10名＋主任1名）
- ・対象利用者数：24名

- ・「気づき」入力期間：平成29年7月29日～平成30年3月2日

- ・「気づき」入力件数：45,335件

b) 平成30年度

- ・対象介護者数：38名（A～Dの全介護者 計36名＋主任2名）

- ・対象利用者数：27名（Aグループの全利用者 24名＋B・C・Dグループ各1名）

- ・「気づき」入力期間：平成30年8月1日～平成31年2月23日

- ・「気づき」入力件数：32,045件

③ 群馬県・前橋市 明風園

a) 平成30年度

- ・対象介護者数：23名（施設管理者3名、作業療法士1名を含む）

- ・対象利用者数：54名（ショートステイ利用者19名を含む）

- ・「気づき」入力期間：平成30年8月1日～平成31年3月1日

- ・「気づき」入力件数：11,143件

b) 平成31年度

- ・対象介護者数：16名（作業療法士1名を含む）

- ・対象利用者数：35名（※入力はピックアップ対象者5名を中心に実施）

- ・「気づき」入力期間：平成31年4月1日～令和元年9月14日

- ・「気づき」入力件数：6,566件

（２）実装支援期間終了後の実装の自立的継続性

事業期間中、名護厚生園では、当初は一部のグループのみで実装が開始されたが、実装効果が現場で共有され、かつ自律的運用も可能となったことを踏まえ、施設側の提案により、最終年度においては、施設内全グループに取り組みが拡大された。

このような状況を踏まえ、全ての実装サイトについて、経営者から、気づき能力向上や介護者間のコミュニケーション活性化の導入効果が評価され、施設長や現場リーダーからは継続運用したいとの意向が示されており、現在、次年度以降の体制整備を進めている。

（３）実装支援期間終了後の実装の他地域への普及可能性

気づきデータに関する取り組みについての知見を有する鳥取県米子市の社会福祉法人こうほうえん、全国社会福祉事業団協議会、介護記録ソフトの大手ベンダーと、今後の普及展開についての協議を実施した。

このうち、こうほうえんは、鳥取県と東京都に展開している同グループ内の複数施設で状態把握システムの実装開始を検討中である。

さらに、全国的に実装を普及していくためには、全国組織との連携が重要であり、本事業当初から連携をしている全国社会福祉事業団協議会と引き続き連携し、沖縄県社会福祉事業団（名護厚生園等）での実装成果を踏まえ、他地域の社会福祉事業団での普及を進めていく予定である。

全国展開を見据えたサービス・サポート体制確立のため、介護記録ソフト大手ベンダーと、次年度以降の体制について協議を進めており、早期の体制確立を図る。

（４）実装活動の社会的副次成果

実装支援期間中、次のような社会的副次的成果が得られた。

- ・ 介護職への社会的理解

沖縄県 宮古島市において、シンポジウム「ICTで変わる介護現場」を、宮古島市、宮古厚生園と連携して実施した（図28参照）シンポジウムでは、「本音で聞きたい介護のホントー介護に関する高校生からの質問に答えます・現役介護士が介護の魅力を語ります」というタイトルで、地元の高校生からの質問に、状態把握システムを利用中の介護者が応答するセッションを実施した。このセッションにおいては、状態把握システムによるやりがい向上等の説明が実施され、同市内での若年層における介護職に関する理解向上に資する取り組みとして、宮古島市がその後の広報等に活用した。

- ・ 他サービスへの拡がり

状態把握システムに関する取組みが雑誌等に掲載されたことを踏まえ、同様の仕組みを、他のヒューマンサービス（保育、キャビンアテンダント等）分野へと適用する事の検討が図られている。特に、保育分野については、国内数カ所の保育施設において具体的な実証等が進められることとなった。



図 28：沖縄県宮古島市主催シンポジウム「ICT で変わる介護現場」のパンフレット

(5) 人材育成

本取り組みを通じ、以下のように、各介護現場において活躍する若手（経験の浅い）介護者の育成に取り組んだ。

- ・ 若手の発言機会の提供

フィードバック会議等の議論の場において、通常では、経験が豊富なベテラン介護者が発言を主導がちであるが、育成の観点から若手介護者の発言の場を設けた。このことが、若手介護者の不安、疑問、困っていることなどを、自分で抱えずに議論を通じて検討する機会となった。

- ・ ベテランと若手の比較

フィードバック会議等の検討資料として、ベテラン介護者と若手介護者の「気づき」の違いを「見える化」したものを常に提供することとした。このことで、若手介護者の気づきの特性や過不足等の把握が常に図られることで、これまで気づけなかったことに気づける等、自身の介護サービスを見直すきっかけとする機会となった。

なお、ベテラン介護者にとっても、若手の「気づき」を把握することは、指導するポイントが明確になるという利点があり、効果的な人材育成に繋がった。

(6) 実装活動で遭遇した問題とその解決策

介護施設では、慢性的な人手不足により、日常業務の負担が多く、新たなデータ入力（業務量の増加）が必要となる本取り組みについての負担感が導入を見送る要因の一つとして指摘された。

そこで、実装活動2年目より、入力対象利用者を限定することで負荷軽減が見込まれる「ピックアップ入力方式」を導入した。その後のアンケート結果により、入力による業務量増和を一定範囲に抑えながら導入による気づき能力向上・サービス質向上を図ることが可能であると推察される結果が得られている。

この結果を踏まえ、「ピックアップ入力方式」の活用を検討し、運用マニュアル等にも反映した。今後の実装に際しては、施設の状況を踏まえながら、「ピックアップ入力方式」の活用についても検討する。

4. 実装活動の組織体制

実装活動の組織体制図は以下の通りである。

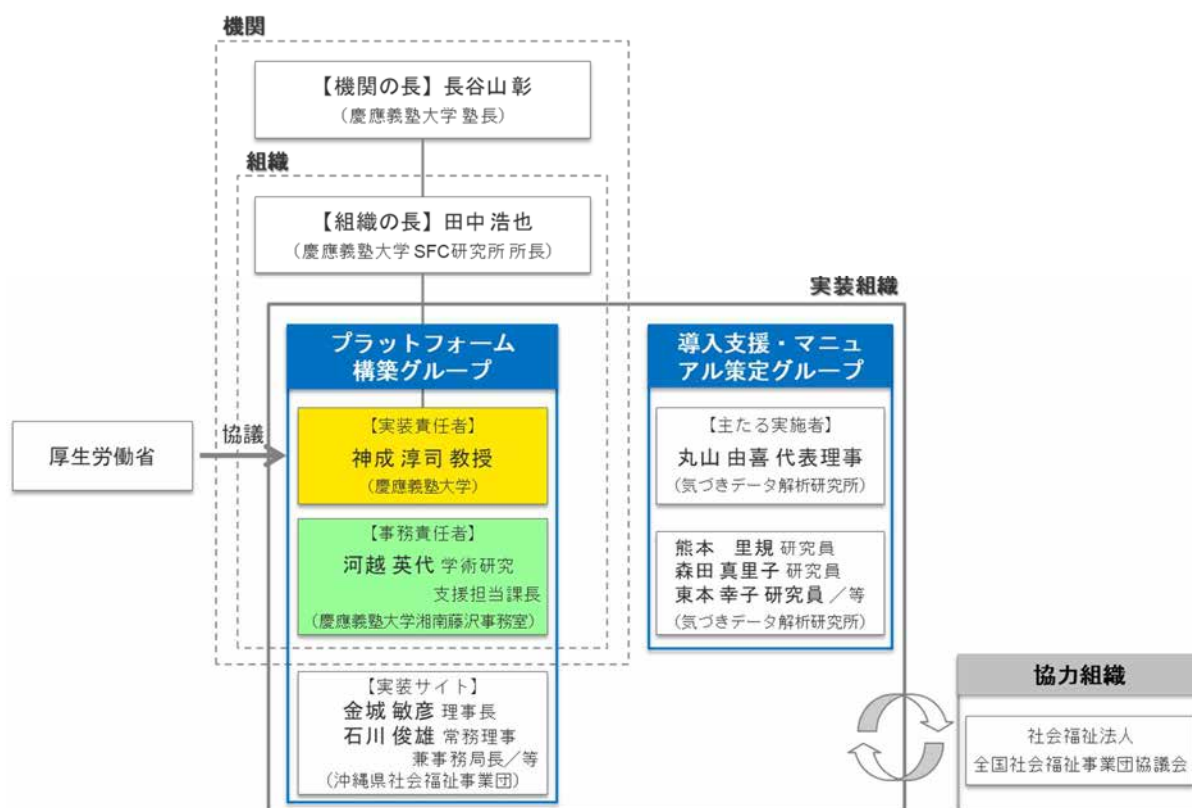


図 29 : 実装活動の組織体制図

採択時からの変更点は、以下の4点である。

- ① 機関の長：長谷山 彰
採択時は、清家 篤であったが、慶應義塾大学塾長の交代に伴い、変更した。
- ② 組織の長：田中 浩也
採択時は、飯森 義徳であったが、慶應義塾大学SFC研究所所長の交代に伴い、変更した。
- ③ 事務責任者：河越 英代
採択時は、小塚 喜之であったが、慶應義塾大学湘南藤沢事務室学術研究支援担当課長の交代に伴い、変更した。
- ④ 主たる実施者：丸山 由喜
採択時は、堀田 慎一であったが、気づきデータ解析研究所代表理事の交代に伴い、変更した。

5. 実装成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動等

(1) 展示会への出展等

年月日	名称	場所	概要	ステークホルダー	社会的インパクト
平成 29 年 2 月 21 日	S3FIRE 終了記念フォーラム	伊藤謝恩ホール	実装活動の基となる研究開発プログラムのポスター発表を行い、本プログラムで社会実装のための導入支援ツールを強化することを紹介。		

(2) 研修会、講習会、視察会、懇談会、シンポジウム等

年月日	名称	場所	概要	ステークホルダー	社会的インパクト
平成 30 年 4 月 23 日	国際医療福祉大学乃木坂スクール特別講義	国際医療福祉大学東京青山キャンパス	国際医療福祉大学が社会人向けに実施する講座：「ICT・人工知能を活用したヘルスケア戦略」第3回の特別講義。 参加者 150 名		
平成 30 年 10 月 25 日	ゆけむり医療ネット特別講演会	大分県別府市	大分県別府市医師会を中心とした地域医療・保健・福祉を連携し、医療の質の向上に資する事を目標としている医療連携ネットワークが主催する講演会において、特別講演を実施した。 参加者 80 名		

(3) 書籍、DVD 等

なし

(4) ウェブサイトによる情報公開

なし

(5) 学会以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・名称：2019 年新春座談会（医療介護福祉政策研究フォーラム主催）

演題：2040 年に向けての医療・介護の挑戦

場所：イイノホール（東京都千代田区）

年月日：平成 31 年 1 月 10 日

- ・名称：令和元年度 21 世紀セミナー

発表者：社会福祉法人 沖縄県社会福祉事業団 名護厚生園 儀保笑美

タイトル：ICT を活用した介護スタッフの人材育成推進

場所：沖縄県総合福祉センター

年月日：令和元年 7 月 5 日

(6) 論文発表（国内誌 0 件・国際誌 0 件）

(7) 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

①招待講演（国内会議 4 件、国際会議 0 件）

- ・発表者：社会福祉法人 沖縄県社会福祉事業団 宮古厚生園 中林利恵子、立津大樹
タイトル：ICT を活用した新たな取り組み～状態把握システムを利用して～
学会名：第二回福祉法人経営学会大会
場所：社会福祉法人 長岡福祉協会 福祉プラザさくら川
年月日：平成 28 年 11 月 19 日
- ・発表者：社会福祉法人 沖縄県社会福祉事業団 名護厚生園 儀保笑美
タイトル：ICT を活用した介護スタッフの人材育成推進
学会名：第三回 情報通信審議会 情報通信政策部会 IoT 新時代の未来づくり検討委員会
人づくりワーキンググループ
場所：総務省 第 3 特別会議室
年月日：平成 30 年 1 月 24 日
- ・発表者：神成淳司（慶應義塾大学）
学会名：AI 技術による新たな「人財教育、評価システム」「技術伝承」、リハビリテーション・ケア合同研究大会 米子 2018（第 22 回 全国リハビリテーション医療研究大会、第 32 回 回復期リハビリテーション病棟協会研究大会、第 39 回 全国デイ・ケア研究大会、第 13 回 日本訪問リハビリテーション協会学術大会、第 40 回 全国地域リハビリテーション研究会、第 13 回 全国地域リハビリテーション支援事業連絡協議会研究大会）
場所：米子コンベンションセンターBiG SHiP・米子市文化ホール
年月日：平成 30 年 10 月 3 日
- ・発表者：神成淳司（慶應義塾大学）
テーマ：「福祉現場における生産性向上とは」
学会名：第 38 回全国社会福祉法人経営者大会
場所：とりぎん文化会館（鳥取県民文化会館）
年月日：令和元年 9 月 12 日

②口頭発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

③ポスター発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

(8) 新聞報道・投稿、受賞等

①新聞報道・投稿（ 1 件）

- ・令和元年 10 月 29 日公開 産業経済新聞社 「～から」
「気づく人」になる＝職人技を見える化する というタイトルで、MIMOTE の取り組み全般を取材・公開。後日、新聞に掲載予定。

②TV放映（ 1 件）

- ・平成 29 年 3 月 2 日放送、NHK「おはよう日本」
「ベテランの技術を新人に共有する」ことをテーマに、約 5 分間、宮古厚生園における状態把握システムを活用した介護の質向上の取り組みを取り上げられた。

③雑誌掲載（ 5 件）

- ・「日経グローバル」 NO.307 平成 29 年 1 月 2 日発行
タイトル：地域論壇「ICT で介護サービスの付加価値向上 「気づき」のデータベース構築し活用」
ICT を活用して介護者の気づいたデータを入力・蓄積し、サービスの質の向上や介護者の待遇改善に結びつけるために開発した状態把握システムを紹介し、その仕組みを解説。

- ・「ケアワーク」 平成 29 年 9 月号 公益財団法人介護労働安定センター
タイトル：「「気づきデータ」を可視化し、より良いサービス提供につなげる ～介護施設での取り組み実績をもとに～」
- ・「経営協」 平成 31 年 1 月号 全国社会福祉法人経営者協議会（経営協）発刊
取材対応者：社会福祉法人沖縄県社会福祉事業団 理事長 金城敏彦
経営者の視点との見出しで、「仕事力と人間力を備えた人材を育成。ICT を活用してサービス向上を推進」をテーマに取材を受け、記事が掲載された。
- ・「月間福祉」 令和元年 7 月号 社会福祉法人全国社会福祉協議会発刊
タイトル：「MIMOTE（被介護者の状態から得られる情報に基づく質の高い介護サービス支援システム）を活用した介護の質の向上と人材育成の取り組み」
「新時代の福祉を支える新たな実践」という特集テーマページで掲載
- ・「月間福祉」 令和元年 8 月号 社会福祉法人全国社会福祉協議会発刊
「令和時代の福祉を展望する」という特集テーマで、「社会福祉の実践に新技術をどのように活かすか」についてのインタビュー内容が掲載され、「状態把握システム（MIMOTE）」に関する取り組みについて言及した。

④受賞（ 0 件）

（9）知財出願

国内出願（ 1 件）

（10）その他特記事項

なし

6. 結び

多くのメディア等で指摘されるように、介護現場を取り巻く状況は、超高齢化社会の急激な到来に伴う人員不足やそれに伴うサービスの質低下の懸念など全体として悪化傾向に陥りかねない。このような状況の中、本事業においては、プロジェクト関係者の熱意もあり、プロジェクト当初計画を上回る成果を収め、今後の全国的なサービス展開の目処が立ちつつある。実際、実装に参加いただいた実装サイトの経営層からは、介護者の気づき能力向上、ひいては介護サービスの質向上が、期待を上回るものであったとの講評を頂き、次年度以降の継続利用の要望を頂くと共に、今後の横展開についての連携も予定している。

社会実装を見据え、実装サイトとは異なる複数の介護事業者との協議も実施した。熱意ある経営者の多くは本事業の取り組みを高く評価し、具体的な導入計画について検討を始めていただいた事業者も少なくない。ただ、現状では、サポート体制が十分に整っていないこともあり、次年度以降での対応をお願いせざるを得ない状況であった。本事業の成果として、導入マニュアルの整備が進んだことも踏まえ、現在連携協議を進めている介護記録ソフトの大手ベンダーと共に、全国展開を積極的に進める予定である。海外展開については、アジア諸国の介護事業関連者より、日本型の介護サービス事業を自国で展開する際のサービスレベルの維持・向上に資する取り組みとしてヒアリングを受け、サービス展開についての検討も進められている。こちらについてもやはり具体的なサービス体制の構築が不可欠であり、今後、具体的な検討が必要とされる。

また、データ利活用環境の整備に向け、厚生労働省が内閣府等と取り組みを進めている。具体的には、個々の介護記録ソフトのフォーマット等が異なり、相互にデータ連携が難しい状況の改善を見据えた、データ連携基盤の構築である。基盤構築により、上述した連携先候補の介護記録ソフト大手ベンダーの導入先施設に留まらない、多様な介護施設への導入が見込まれる事となる。

なお、当初より、各実装サイトが沖縄県と群馬県と離れた拠点となる点がコミュニケーション不足となる点が懸念されたが、連携先である「気づきデータ解析研究所」の皆さんの熱心なサポート、そして何より各実装サイトにおいてプロジェクトに関与くださった多数の皆さんの介護現場の状況改善に資する本事業を進めようという熱心な思いにより、当初スケジュールを踏まえ、順調に運営する事が出来た。ここに改めて御礼を申し上げる次第である。

最後に、本プロジェクトを、的確なアドバイスと共に温かく見守ってくださった、富浦梓プログラム総括を始めとした皆様、そして、細かな点を含め相談に載ってくださったJST事務局の皆様に感謝します。本当にありがとうございました。



図 30 : 沖縄県社会福祉事業団・名護厚生園での実装活動の様子